英国春秋

2018年秋号ISSUE 33発行英国日本人会



はじめに

澄み切った秋空に鰯雲が浮かぶ風景に見とれ、それでは一句、と思い立ちました。が、思いつくのは名 句ならず迷句ばかり。それではと時間を変えて、夜空に輝く月を見て、「仲秋や 月のウサギの 阿波踊

り」と詠んでみました。しかし、これは少々乗り過ぎで他の人には意味不明、きっとジャパン祭りでの阿波踊りの練習をやり過ぎたからなのでしょう。



今年は 1976 年以来の暑い夏が続き、渡英以来初めての「暑中見舞い」なるものをイギリス在住の友に送りました。「日本の極暑に比べれば・・・」と思いながら、庭の草木の安否を気遣い、地球温暖化の結果かも知れないと心配しつつ過ごした夏が、あっと言う間に過ぎ去って行きました。時の流れは、加齢とともに、そのスピードを上げて行くものなのでしょう。

暑い日が長く続いたおかげで良いこと・悪いことが沢山あったと聞きます。

多くの農園ではリンゴが豊作で、果実は例年より甘いそうです。が反面、大麦は、不作だったとかで、これでキリンビールの輸入量が増えるのでしょうか。毎年、近くの野原に摘みに出かける"ブラックベリー"は大豊作で、余った分でジャムをつくりました。幾つかの植物園では、珍しい花の開花、100年に一度とか、イギリスに移植されて以来とかがあったと報告されています。庭にやってくるリスにとっては、どんぐりの実が例年以上の収穫高となり、その結果、私は大被害を被っています。庭のあちこち、そして、鉢植の鉢の土が彼らによって掘り返され、どんぐりの貯蔵庫にされてしまうからです。これから冬と春先にかけて、それを回収にやってきますので、またまた掘り返し作業が行われます。まるでイギリスの道路工事のようです。しかし、この暑い夏がUKの経済のブースト的役割を果たしたとかで、Brexit 問題等で混迷しているのをしり目に、良い数字が出ているそうです。きっと、アイスクリームやビキニ、そして扇風機の売り上げが上がったせいでしょうか?

今号も多くの興味あるエッセイや名句を投稿していただきました。奇しくも、ソ連時代の話とかロシアのスパイの話が数ページ飾り、それらが忘れ去っていた"USSR"とか"鉄のカーテン"の言葉を思い出させてくれました。我々日本人にとって、ロシア文学とかロシア民謡には親しみを感じさせてくれますが、国、そして国民にはもう一つよく分からない点が・・・と言う気持ちがあるようです。ウクライナ、クリミア、シリアその他の諸問題を力で解決しようとする、ロシア政権、プーチンに反感を抱く人は、きっと少なくないことでしょう。1917年のロシア革命で、帝政ロシアが崩壊し、ツァーリ制度が廃止になりましたが、それから100年後の現在、富と権力を両手にツァーリ・プーチンの帝政ロシアが返り咲いた感しかりです。

『英国春秋』秋号 No.33 の完成。随筆、俳句、短歌、川柳等、数々の素晴らしい作品をお送りいただいた皆様に心よりお礼申し上げます。秋のジャパン祭りで、JA主催の「みんなで阿波踊り」の準備に追われ、編集の仕事が二の次になるかと思いきや、次々到着する皆様からの原稿に魅せられ、今まで通り"一の次"、最優先で行いました。次号の春号は『英国春秋』発行20周年に当たり、既にご寄稿をお約束いただいた方々もおられますので、今から楽しみにしております。今後も引き続き皆様のご支援を宜しくお願いいたします。



* * * * * * *

はじめに			2
私の楽しみ		加藤節雄	4
奈良基督教会の和風		清瀬みさを	5
ソ連10題		鶴岡公二	$6 \sim 9$
英国春秋つれづれに	「ダ スヴィダーニャ ドゥルジア」		9
二重スパイ考		古川隆	$10 \sim 12$
銭 湯		岡部道	1 2
英国春秋川柳	気が付けば	キング悦子	1 3
映画技法と映画美学の成り立ち		渡邊道英	$14 \sim 16$
老いの効用		石山望	$17 \sim 18$
母の日		石山望	$1.8 \sim 1.9$
英国春秋俳壇	夏帽子	俳句同好会	2 0
英国春秋俳壇	朝 顔	エリオットつや子	2 1
食欲の秋に楽しむ	英国の口福	マクギネス真美	$22 \sim 23$
不当な扱いを受けた主人公 リゴレットとシャイロック		小川のり子	$24 \sim 26$
私の楽しみ		鈴木ナオミ	2 6
日本旅行	日本旅行から帰って気付いたこと	田村陽子	$27 \sim 29$
英国春秋歌壇	孫の姿を	バロー典子	3 0
英国春秋俳壇	秋の雷	クーパー矩子	3 1
私の好きな人	ファーガス・アンコーン	ビドル惠	$32 \sim 35$

特別寄稿

清瀬みさを氏 (同志社大学文学部教授) 鶴岡公二氏 (在英国日本国特命全権大使) マクギネス真美氏 (編集&ライター)

(アイウエオ順)



私の楽しみ

加藤節雄

中年以上の日本人男性の特徴ではないかと思われるが、今まで仕事ばかりしてき て、趣味というものを育ててこなかった。特に私はフリーランスのフォトジャーナ リストを生業(なりわい)としてきたため、仕事が楽しみであり、仕事を通して、 世界中を回ったし、通常では会えない人にも会えたし、大きな催し物やスポーツ大 会にも取材という名目で入場できた。

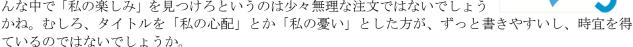
でも、「仕事が楽しみ」というのでは、あまりにもあまりである。何か「私の楽し み」を探すことにしよう。では格好良くゴルフをしているかというと「No!」である。ゴルフをしない ことを自慢してきた傾向もある。絵画や陶芸制作などはどうだろうか。これも「No!」である。身近にい る陶芸家や画家を見ていると自分には到底出来そうもないと、始める前から諦めてしまっている。脳の 活性化には外国語の勉強が良いと言われているが、英語がやっと出来るようになったのに今更別の外国 語を勉強する気にはなれない。それよりも激しく変わる日本語についていくのが精いっぱいである。

自分で積極的に挑戦する趣味から一歩下がって、映画や音楽鑑賞というのはどうだろうか。どちらも 好きであることには間違いない。その場に行けば楽しいし、豊かな気持ちになる。では、自分で積極的 に好きなものを探して、出かけるかというと、これまた「No!」である。何かチャンスがあったり、誰 かに誘われたりすれば喜んでいくという程度なので、これでは「楽しみ」とは言えそうもない。

「旅行が趣味です」とか「テニスを毎週やってます」と楽しそうに語る人がいる。羨まし限りだ。旅 行は仕事を通して、英国内は離島も含めてほとんど回ったし、ヨーロッパもほとんど、そしてアジアや アフリカ、北米・南米へも出かけた。スポーツは高校生時代以来、本格的に挑戦したことがないのが実 情だ。

それでもと、自分で開き直って、「何か一つぐらいは楽しみがあるだろう」と考えてみるが、今の世の

中、楽しいことなんてあまり無いのではないだろうか。世界を見れば、アメリカ の協調性のない一国主義、経済力や軍事力で周辺国への影響力拡大を目指す中国、 大国の私利私欲に弄ばれて泥沼と化している中東の紛争、ヨーロッパへの難民の 大量流出、英国最大の危機 Brexit の先行き不安、我が日本も酷暑の後には大雨、 大型台風、地震と自然災害が相次ぎ、世界はこれからどうなるのだろうかと心配 になることばかりである。貧富の差が拡大し、民主主義の根幹も揺らいでる。そ んな中で「私の楽しみ」を見つけろというのは少々無理な注文ではないでしょう





とはいうものの、世界を嘆きながら生きるのは、これもどうかと思う。長く生きてきた人生である。 少しは楽しみもあったのではないだろうか。最近、イギリスのウエスト・カントリ 一のデボンに月のうち10日間ぐらい住むようになった。庭が広いので一部を耕して 野菜を育てている。ジャガイモ、玉ねぎ、20日大根、キャベツ、トウモロコシとい った普通の野菜から、大根、ごぼう、枝豆等の日本野菜まで育てている。庭の先に は小川が流れていて、夏場の雨が少ない時でも土が乾き上がることはない。種や苗 から育てて収穫を迎える楽しみは、多分ゴルフや旅行では得られない喜びではない だろうか。

> なんだ、やはり楽しみはあったじゃないか。確かにありました。そしてもう一つ 見つけました。それはこの原稿を書きながら、モルト・ウイスキーをちびちびやっ ていることです。

奈良基督教会の和風

清瀬 みさを

近代に入ってから、主要都市の鉄道駅舎はロンドン・ヴィクトリア駅の偉容を引き合いに出すまでもなく、どの国でも、その都市の表玄関としての意匠が凝らされます。しかし、世界有数の観光地である京都の表玄関・JR 京都駅は、「古都」あるいは「歴史的都市」のイメージを求めてやってくる修学旅行生、国内外からの観光客の期待をあっさり裏切るような、時代の先端を行く斬新な現代建築です。一方、もうひとつの古都である奈良はどうでしょうか。興福寺、東大寺、春日大社へのアクセスである近鉄(近畿日本鉄道)の奈良駅は、地下に設置され地上には駅舎らしきものは見られません。大正3(1914)年の開業時には地上駅でしたが、次第に駅周辺の交通渋滞が深刻になり、大阪万国博覧会の開催を控えた昭和43(1968)年、奈良市内の都市計画事業の一環として、現在の新大宮駅の東から奈良駅までが地下に埋設された結果です。

交通渋滞の解消という問題はさておいて、同じ古都と並び称せられる京都と奈良ですが、駅舎ひとつをとっても都市景観に対する取り組み、あるいは都市の Identity に関する極めて大きな違いがあります。それの理由については、追々解き明かして行きたいと思います。ここでは、まず、キリスト教諸派のうちで 16 世紀に成立した英国国教会 The Church of England がアメリカを経由し、遥かな時空の果てに奈良のアイデンティティと異文化とが見事な調和を実現した木造和風のキリスト教建築をご紹介いたします。



昭和5(1930)年、興福寺の旧境内地に竣工した日本聖公会(The Anglican-Episcopal Church in Japan)の奈良基督教会 The Nara Episcopal Church の礼拝堂です。信徒で宮大工の大木吉太郎(明治20[1887]-昭和46[1971]年)設計・施行になるこの聖堂建築は、平成27(2015)年7月8日、文化庁により「意匠的に優秀なもの」として、国登録重要文化財に指定されました。それに先立つ平成9(1997)年、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」として有形文化財に登録されています。

この聖堂は、近鉄奈良駅から地上に出てすぐに南へ三条通までを結び、一日中観 光客で溢れるアーケードの東向(ひがしむき)商店街に正門を構えています。正門 からは、白御影の石段が青い銅板葺・切妻屋根の仏教寺院風の玄関口へと導きます。 この玄関の棟瓦の図柄もその上に戴く十字架も、キリスト教会と知らなければ見逃

してしまいますが、棟瓦には抱鳩の上に三位一体を表す三葉形に十字架があしらわれています。石段を登ると右手には興福寺南円堂の屋根が間近に迫って見えます。

聖堂外観は、緩やかな勾配の桟瓦葺の入母屋破風屋根、漆喰の真壁造 (half-timber) と仏教寺院風の木造建築です。ところが、玄関で靴を脱いで(!)堂内に入ると、床平面はラテン十字・三廊式、壁面の立面も窓、欄間と高窓と三層の明かり取りを持ち、身廊 (nave) から段と欄間で区切られた内陣は向かって左手に説教壇、右手に聖書朗読台を備えた聖所 (chancel)から至聖所 (sanctuary)、祭壇で構成されています。つまり、



まがうことなく長堂式の西方キリスト教会建築そのものです。さらに身廊の裾にはドイツのウェルナー・ボッシュ社製の 18 ストップ、パイプが 1200 本余り、平行ペダルの堂々としたパイプオルガンが設置されています。

しかし、堂内は外観同様、純粋な木造の伝統建築に他なりません。良質な吉野の檜の柱は、外陣では



角柱、内陣は丸柱と日本の宗教建築の作法を踏まえ、桐材の天井は格の高い格天井になっていて、窓は障子とも見える磨りガラスの矩形桟窓です。身廊と聖所の頭上は雲形の透彫の欄間で仕切られ、聖書朗読台は日本の提灯掛けを 90 度回転させた形です。刎(はね)高欄が聖所、至聖所を区切る内陣空間には神道建築の印象があります。そして、祭壇上の十字架、燭台、花瓶は正倉院御物を手本とする七宝製で、十字架の中心には天平風の宝相華文様があしらわれています。京都では明治時代からフランス・ゴシック様式のカトリック教会がありましたし、御所の周りにはキリスト教諸派がさまざまな形の宗教建築を立ち上げています。では、奈良基督教会の和風はどのような歴史的条件や制約から作られたのでしょうか、次回はそれをひもといてみましょう。

ソ連 10 題

鶴岡 公二

私は、外務省入省後 4 つの大使館で勤務してきました。ソ連、米国、インドネシアと英国です。今回は 最初の海外任地だったソ連、モスクワについて書いてみます。

ソ連はすでに崩壊してロシアになっているので、私が赴任したモスクワは もはやありません。私の海外勤務の中で最も異国情緒があふれていたのは モスクワでした。共産主義の国は全く違ったのです。

私は、1986年に外務省からソ連大使館に異動しました。当時のソ連はゴルバチョフ書記長の下でペレストロイカと言う改革の中にありました。激動のソ連だったと思います。日本では出来ない経験をしましたのでそれをご披露したいと思います。

1. 電話

当時のモスクワでは外国人は外交団も含め自由に家を探すことは出来ませんでした。外交団の住居はソ連外務省の外交団世話部と言う部署があてがうものでした。私が入居したのはかつて先輩の小和田前国際司法裁判所判事が住んでいたアパートでしたので、雅子妃殿下もお住まいになられたアパートです。私は家族同伴の上モスクワには木曜日に着任し、金曜日に大使館に出向いて大使始め館員に挨拶をして、土日を休んで週明けから本格的に勤務を開始する予定でした。初めてのモスクワで週末と言ってもどこにも行けないので、先輩が車で案内をしてくれる手はずになっていて、電話で連絡をくれることになっていました。土曜日の朝にかかってくるはずの電話がかかってきません。電話を取ってみるとうんともすんともいいません。携帯のない時代なのでそのうちかかってくるだろうと思っていましたが結局電話はなく、先輩はアパートまで来てくれました。電話がずっとお話中になっているとのことだったので、電話が故障しているのではないかと思い、早速先輩と新しい電話機を買いに行きました。電話機は首尾良く手に入れて付け替えましたが依然として電話は不調です。たまにつながっているようですが、週末を通じて結局電話は使えませんでした。月曜日に大使館に行って技術の人に来てもらい調べてもらいましたが、その時には電話は問題なく、たまたま回線がつながらなかったのだろうとの結論になりました。確かにその後電話は問題なくつながりましたが、週末が来るとまたつながらなくなったのです。不思議



なことがあるものだと今度は何回も受話器を取り上げて耳を当ててみると、 時々物音が聞こえます。ロシア語の会話のようです。私はロシア語ができないので何を話しているかわかりませんが、明らかに人が話をしています。それが突然無音になり切れることが繰り返しありました。週末が過ぎるとまた電話は復旧しました。一体これはどういうことか。誰に聞いてもわかりません。しばらくモスクワ勤務を続けて私が到達した結論は電話の傍聴をする人

が週末は人手が少なくなるので電話を切ってしまうと言うことです。特に着任直後は注目度が高く、電話の会話を一言漏らさず傍聴して報告することになっているようで、滞在期間が長くなったら電話の問題はなくなったのです。

2. 家庭教師

私共夫妻はロシア語の専門ではないので、日常生活に必要なロシア語の勉強のために家庭教師を依頼しました。前述の外交団世話部から金髪の女性教師が派遣されてきました。日本語も出来る人でロシア語の初歩の手ほどきをしてくれます。経験豊かな人のようで教え方も上手なのですが、強烈な香りの香水をつけていて、私は閉口しました。彼女が帰った後で家内にいい先生だけど香水には参ったなと言ったら、次回に来たときにはまったく何の香りもしませんでした。なるほど要望があれば壁に言うと実現する便利な国だなと思いました。教師はロシア語の授業と言って、私達の生い立ちやこれまでの教育や交友関係をロシア語で語らせるようにしましたが、これももちろん当局に報告するための情報を取っていたのでしょう。ご苦労なことと感心すると共にあきれました。

3. 女中

私達が入ったアパートには代々の日本大使館員のお世話をしてきた女中さんがいました。料理や掃除洗



濯をしてくれる人で,50歳ぐらいの女性でした。とても素朴なロシア人です。週末を除いて毎日アパートに来てくれるのですが,月に一回水曜日の午後は休みを取るとのことです。最初のうちは何も言わずに休みを取っていたのですが,ある火曜日に明日午後に外交団世話部に行くのだけど,家族構成を報告することを求められているので正確に教えてほしいとの要望です。月に一回家庭に入っている女中さんは外交団の家庭の模様を当局に報告する義務があるようでした。彼女は正直な人なので素直に私達に当局が求めている情報の提供を要望したのです。これもご苦労なことと思いましたが,良く働く女中さんが当局からいじめられては気の毒だと思い,私共家族の情報は

正確にお伝えしました。不思議なことにその後は彼女から照会がありませんでしたが、多分家族の趣味や食事の好みなどを報告していたのでしょう。

4. 旅行

共産主義体制のもとでは外国人は国内を自由に移動できません。モスクワ市内は自由なのですが、市外に出るときには許可が必要です。外交団用にソ連政府は郊外に保養施設を設けていました。ザビードバと言うホテルです。広い敷地の中にあって、売り物はクレー射撃とサウナでした。私共家族も時々利用しました。モスクワ市内から車で一時間ほどの郊外にありました。モスクワは大環状道路が市の外縁を一周しており、その道を抜けると原生林が続く豊かな自然の中をのどかな道が走っています。ザビードバに予約をして行くときにはソ連外務省に届け、許可をもらって出かけます。道も指定されます。私達

が車で走り所々にある警官の詰め所を通ると通り過ぎた後に電話で警官が報告する姿が見えます。道は単純な一本道なのですがそれでも分かれ道があり、間違えて細い道に入ってしまいました。すると間髪を入れずパトカーが猛スピードでやってきて、この道ではなく戻って幹線道路を走るように指導されました。ナビがない時代でしたがおかげで道に迷うことはまったくなく、いつも安心して目的地に到着しました。途中で車を止めて休憩していてもパトカーがすっ飛んできて、前に進むように指導されましたの、到着時間もいつ



も正確でした。外交団家族が休暇で車で移動する時にはソ連の警官は大変だったと思います。お疲れ様です。

5. ルイノク(市場)

ソ連時代にはすべてが国営でごく例外的に一部自由市場がありました。野菜や肉を売る市場です。店に行っても何もなく私達は食料品は外国人用のドルで支払う小さなスーパーで購入していましたが、市場があるというので家内と一緒に行きました。肉や野菜がモスクワとは思えないほど豊富に並んでいました。私達はジャガイモを買うために行列に並び順番を待ちました。売り手は両側に大きな麻袋を置いて、お客に両側の袋から交互に一つずつ芋を取ってはお客が持ってきた袋に入れている。私達にも同じ売り方をしたので、二つの袋の芋の違いを聞いてみると、一方は正常な芋、もう一方は発芽してしまい食べられない芋とのことです。私達は正常な芋だけを袋に入れてくれるように頼んだらそれは出来ない、生産された芋である以上正常でなくてもお客に売らなければならないのです。袋にいっぱいになった芋を家でより分ける作業が待っていました。自由市場と言っても国営農場の収穫物なのですべて売るのです。

6. ボリショイ劇場

ソ連では文化が重視されオペラ,バレーなど一流の舞台芸術を楽しめました。劇団員は国の職員であり、プリマなどのスターはソ連邦の労働勲章を受章している英雄です。もちろん人気が高く通常では席を買うことはほとんど不可能でした。国営の旅行代理店が外国人用に押さえてあるドルで販売する席は、団体旅行で来る外国人用に割り当てられていて私達は購入出来ませんでした。ところが、ソ連では外交団に対する特別待遇で外交団の身分証明書を持って公演数日前に売り場に行くと切符を購入できました。しかも値段は数百円相当の信じられない安さです。家内は売り場通いが日課になりました。おかげで家内共々ボリショイを堪能しました。文化と無縁だった私も大舞台でのオペラやバレーにすっかり魅了されました。ソ連では外交団は共産党の幹部同様に特権階級扱いだったのです。

7. 買い物

モスクワでは街を歩くと所々で行列を見ます。当時は行列を見つけたら市民は必ず並びます。肉や野菜, あるいは日用品なども通常は店にないが,行列しているところにはあるからです。モスクワで日本人が

楽しみにしていたのが時折入荷する蟹でした。冷凍の蟹が入荷するとモスクワ日本人電話連絡網で情報が流れ、あっという間に店の前に日本人が大集合して行列です。もちろん現地の人達も行列しているので並べば買えるという保証はありませんが、運が良ければ美味しい蟹を手に入りました。同じように珍しいものが見つかると電話連絡網でお互いに情報を提供しあうことがモスクワ生活を楽しむ秘訣でした。しかしながら、とにかく店になにもない。そこで、私達はヘルシンキから毎週金曜日の列車で届く今で言えば宅配便を



活用しました。水、ミルク、卵、バナナなど食料品はもちろん、洗剤などの生活必需品すべてです。特に必要とされたのは極寒の冬装備です。不思議なことにモスクワでは必要な衣服は調達が困難であると言われて私達家族はヘルシンキに行って冬物を買いました。モスクワからヘルシンキまでは赤い矢と言う特急列車でした。夜行の一等車両は個別の仕切りのある寝台の部屋でした。ロシア紅茶が提供され、それなりの食事も出快適な旅でした。レニングラードを越えてフィンランド国境に出たところで入国手続きがあり列車は停車しました。乗客は足を伸ばしに列車を降りて何もない駅のプラットホームを歩いていたので私達も降りました。駅の空気を吸ったとき、肩の荷が下りて突然体が軽くなった気がしました。なるほど監視された環境にいるときには知らず知らず緊張していたのか、空気には重さがあるものだと痛感しました。

8. 交通と車

モスクワの公共交通はバスと地下鉄です。地下鉄はスターリンが国威をかけて作り上げた地下宮殿とも言われる荘厳な駅から乗ります。地下深くを走っているのは万一の際の防空壕として機能することも想定されていると言われています。当時のモスクワは車と言えば共産党幹部の乗るジルという大型乗用車が広い幹線道路の中央にある特権車線を猛スピードで走るのと、旧式のロシア製の乗用車がちらほら走る程度で渋滞になるような交通量ではありませんでした。その中で、外交団は外国車を走らせることができて、車の運転については誠に快適な環境でした。冬になると極寒の中で雪も降り道は凍り付きます。滑るので毎日大量の塩の入った砂を道路にまきます。ソ連の車はスパイクタイヤをはいていませんから凍った道は走れない上に塩をまいた道を走れば、車体が錆びてしまいます。そこで車は冬眠するのです。灰色になった大通りにほとんど車が走らなくなった中で外交団の運転する外車が走るのです。車がほとんど走っていないので走りやすく、日本では運転しない家内もモスクワでは車ででかけていました。

9. ダーチャ (別荘)

モスクワは大都市で住居は基本的にはアパートです。ロシア人は自然を愛する人達で週末には郊外にあ



る別荘で暮らす人が少なくありません。それが特に贅沢とは見なされておらず、現に別荘と言っても電気水道などがやっと来ているような質素なものが多いようです。ソ連政府はモスクワの外交団にも別荘を貸与していて日本大使館も都心から40分程度のモスクワ川のほとりに木造二階建ての庭付きのささやかな別荘を借りていました。季節の良いときには子供のいる大使館員は週末この別荘でバーベキューをしたり冬は小さなリンクでスケートをしたりロシア人のような週末を過ごしました。市内での娯楽は限られているので小さな庭で自然に親しみながら穏やかな週末を送るのは大使館員と家族の楽しみでした。ソ連が崩壊してロシアに

なった以降この別荘は返上したそうです。

10. 外国人専用施設

ソ連時代に外国人はロシア人と接触することは原則禁止されていました。住居も外国人用に割り振られ 当局の許可のないロシア人はその区域には入れませんでした。他方,外交活動の一環で日頃お付き合い するソ連政府の人や有識者を自宅に招いて懇談する機会は少なくありませんでした。外国人の家に入れ るのは彼らが当局から外国人と接触する許可を得ていることを示しています。 ホテルも外国人専用の国際ホテルがありました。近代建築の大型ホテルで施設も整備され、桜と言う日本レストランもありました。今はクラウンプラザに生まれ変わっていますが、ソ連時代は国営のホテルでした。このホテルに入るには身分証を提示する必要があります。外国人なら入れますが、ロシア人は



特別の資格を有する人だけが入れるのです。当時のモスクワでは唯一のまともなホテルだったので私は、日本からのお客様のご案内で何回となくこのホテルには参りました。冬のモスクワは零下20度は当然で、30度近くまで冷え込むこともありますのでみな厚手のコートと帽子を着ています。ホテルやレストラン、劇場などに入るとクロークにこれらを預けます。用が済んで引換券を渡してコートなどを引き取るのですが、その時に担当する人に渡すと喜ばれるのはカードになっているカレンダーでした。社によってはわざわざソ連用に作っているとも言われていましたが、カードの片側にはカレンダー、

もう一方には女性の写真があるのです。現地通貨のルーブルをチップで渡しても、相手からはカレンダーリ(小さなカレンダーと言うロシア語)は?と聞かれるのです。どうやらカレンダーリは通貨代わりに利用価値があったようです。したがって外国人はどこに出かけるにもカレンダーリを持って行かねばならないのですが、日本ではそのようなものは流通していないのでいつも探していた記憶があります。このホテルでもう一つ思い出すのは会計をするときに使用可能なクレジットカードの種類が極めて豊富だったことです。聞いたことがないようなカードも見本が並んでいて、ホテルはどれでも受け付けます。いかに外貨が貴重なのか示していました。もちろんこのホテルではすべての支払いは外貨でした。

英国春秋つれづれに

「ダ スヴィダーニャ ドゥルジア」

もう半世紀近くも昔の話、時は夏、場所はモスクワでした。初めての外国のそれも一人旅。いやが上にも武者ぶるいならぬ、姫ぶるい をしながらの旅になりました。ハバロフスク行きの汽車が発車の合図もなく急に動き出したので慌てて飛び乗り、これを逃せば明日まで後便がないと聞いて、青くなりました。モスクワまでの飛行機は古いツポレフで、非常時には戦闘機に早変わりと隣席の人に教えられ、思わず、"敵機"らしいのがいないかと窓の外を覗いてしまいました。

6月のモスクワは、街中にポプラの綿毛が舞う季節。空中はおろか、道路の端はうっすら積もった それで、まるで粉雪が降ったように白くなっていました。赤の広場にあるレーニン廟は長蛇の列で、 靖国神社参拝者の数とは比べ物にならないと、ひどく感心したものでした。広場をはさんでクレム リンと向かい合って立つ3階建の百貨店グムにも、長蛇の列が出来ていました。「一体何に?」とそ の先を覗いてみましたら、なんとひからびたオレンジで、それを買おうと主婦たちが必死の様相で 順番を争っていました。ロシア美術品が集められているトレチャコフ美術館にも出かけました。そ の帰り道、ロシア人の親子に道を聞かれました。これはヨーロッパ旅行中度々経験しましたが、外 国人の私に平気で道を聞くのには驚き、それもロシア語で、です。ペラペラと早口で喋られる中、 唯一、トレチャコフと言う言葉が聞き取れましたので、質問は大よそ見当が付きました。そこで今 行ってきた美術館の方向を示しながら、「ダー、ダー、ダー」と身振り手振り宜しく道順を教えまし た。"ダー、(Yes)"と言う一語のロシア語だけの説明を聞いて理解したどうかは不明でしたが、に っこり笑いながら「スパスィーバ!」と返事が返ってきました。そこで勇気づけられた私は、「ダス ヴィダーニャドゥルジア」と小声で言ってみました。突然二人の相好がくずれました。ニコニコ と笑いながら、また「スパスィーバ」の繰返しでした。日本を出る前に、NHKの「ロシア語入門」 なるものを半分眠りながら聞いていたのが、役にたちました。毎朝、放送の最後に講師が聴衆者に 呼びかけた言葉がこのフレーズで、「さようなら、同志たち!」だったのです。ダー、ダーで押し通 した、東洋人の女の子からよもや"同志よ!"と呼びかけられるとは、予想だにしてなかったこと でしょう。その後、ちょっぴり得意になってホテルに戻りました。

そう、あれから半世紀近くが過ぎ去って行きましたが、意気揚々としてモスクワの街を歩いた思い 出が、今なお鮮やかに蘇ってくるようです。

二重スパイ考

古川 隆

3月上旬、大雪被害の報道がやっと鳴りをひそめたと思ったら、今度はロシアの double agent (二重スパイ), Sergei Skripal (セルゲイ・スクリパル)とその娘 Yulia (ユリア)の神経ガス Novichok (ノビチョク) 使用による暗殺未遂事件がマスコミを賑わせている。二人は昏睡状態であるという。現場となったレストランとその周辺では大規模なガスの消滅作業が行われるなど、静かな Salisbury (ソールズバリー) の町は大騒ぎとなっている。(5月下旬二人は意識を取り戻し、安全な場所に保護されている)

テレザ・メイ首相は、ロシアが背後で糸を引いている可能性が限りなく高い、と議会で述べ、駐ロンドンロシア大使に対しこの神経ガスについての責任ある説明を求めている。しかし、当然のことながらクレムリンは関与を否定しているし、ロシアが肯定するわけがないのは自明の理。BBCの質問に対しプーチン大統領は、鼻であしらうような態度であった。我々素人が考えても磁石の針は限りなくクレムリンを指しているように思えるのだが。

米・中・露が覇権を競いあう現今、各国のスパイ活動は曾ての冷戦時を凌ぐのではないだろうか。スクリパルが重大な秘密情報を持っていたために命を狙われたのか、それとも裏切り者への見せしめのためかは、被害者二人にとっても、特に娘のユリアにとっては、何がなんだかわからず、恐らく真相は藪の中であろう。

お馴染み 007 のイアン・フレミングを始めとして、グレアム・グリーン、ジョン・ル・カレ、フレデリック・フォーサイス、アンドリュー・ホッジス、ジャック・ヒギンスなどなど枚挙にいとまがないほど多くの作家のスパイ小説が数多く出版されており、英国は正にスパイ小説の宝庫と言えるかもしれない。それらの作品群は、英国のみならず世界中で広く愛読されている。その英国で、今回のような事件が引き起こされたので、それを題材にした小説をものにしようと心を弾ませている作家もいるにちがいない。



第二次大戦中から冷戦時代にかけて、いや今もかなりの数のスパイが各国で暗躍しているものと思われるが、中にはセルゲイのように二重スパイとして活躍(?)している者も多いのではなかろうか。

英国における二重スパイ事件で有名なのは、ケンブリッジ・ファイブ。キム・フィルビー(ロシアへ亡命)、ドナルド・マクリアン、(ロシアへ亡命)、ガイ・バージェス (ロシアへ亡命)、アントニー・ブラント (1964 年死亡)、ジョン・ケアクロス (1964 年死亡)。彼らは皆ケンブリッジ大学の優秀な学生たち。

1950年代のケンブリッジ大学にはマルクス主義に傾倒する学生が大勢いた。この五人は卒業後、政府機関の要職に就いており、中でもアントニー・ブラントは一時国王ジョージ六世や現女王のアドバイザーとしての役割も務めていた。彼らがスパイであったことが同時に露見したわけではないが、暴露された事情や年代を述べた書物は数多い。ケンブリッジ・ファイブとは 1961年、KGB(旧ソ連諜報機関)からの亡命者アナトリー・ゴリツィンが名付けたもの。

二重スパイ事件の中でも最大の話題となったのは、英国諜報機関で働いていたジョージ・ブレイク。

ただ単に二重スパイであったというだけではない。発覚後に行われた 1961 年 5 月の裁判で国家反逆罪として 42 年の懲役刑の判決を受け、英国で最も監視の厳しいと言われたワームウッド・スクラブス刑務所に収容された。しかし、話はこれで終わったわけではなく、この厳重な刑務所から見事脱獄に成功したのである。1966 年 10 月 22 日のことであった。

この脱獄事件に関しては、スコットンド・ヤードを始めとする官憲の必死の捜査にも関わらず、犯人を特定することが出来ず、諸説が流れるなか、最終的には KGB (旧ソ連の秘密諜報機関) の仕業であろう、という推論が出されて幕を閉じた。が、しかし、この脱獄計画立案者の一人が他の二人との約束を破り 1970 年に手記を出版したことによりその実行犯は思いもよらぬ人物たちであったことが判明。世間に衝撃を与えるとともに捜査陣は大失態を晒すこととなった。

1950~60 年代、英国では平和運動や反核兵器運動が燃え上がった時代であった。 Direct Action Committee (DAC), Committee 100, 非暴力主義の Peace Pledge Union (PPU), 反核兵器グループ CND (Campaign for Nuclear Disarmament), ガンジーの思想に共鳴する Operation Gandhi などなど。バートランド・ラッセルなどの著名人も積極的に関与した。

第二次大戦後、英国には当然のごとく数多くの米軍基地が設置され、その多くはロケット装置を備え、標的は勿論旧ソ連とその陣営。1952 年 Hugh Brock (ヒュー・ブロック) の主導する Operation Gandhi と Direct Action Committee (DAC) は、イースター島での核実験に反対し、核兵器研究施設のあったバークシャー州オールダマストン (Aldermaston)へ行進。1958 年 2 回目の行進時には、他のグループも参加したことで、数千人の参加者となりロンドン・トラファルガー・スクエアから基地までの約83 kmを行進した。 反核兵器運動の大きなうねりであった。





コミッティ 100 のメンバーであった Michael Randol (マイケル・ランドル)と Pat Pottle (パット・ポトル)は、米基地撤去、核兵器廃棄などを求めるデモや国会前の座り込みを始めとする平和活動を盛んに行っていた。

1962年イースト・アングリアのウェザーズフィールドにある米軍ロケット基地での座込みデモ行為により二人は逮捕され、18ヶ月の懲役刑を受け、先述のワームウッド・スクラブ刑務所に収監される。

偶然というのは実に面白いというか奇妙なもので、正に「事実は小説より奇なり」である。マイケルとパットが収監された監獄には、アイルランド人で爆発物を刑事巡査に送りつけた廉で7年間の懲役刑を課せられていたショーン・バークという男とソ連の二重スパイを務めていた罪で42年の懲役刑に服していたジョージ・ブレイクが同房だったことは、不思議な巡り合わせであったと言う他はない。

マイケルとパットはブレイクの国家反逆罪は認めるが、42年の懲役刑は人道的見地からして厳しすぎるという見解のもと、何とかそれを短縮する方法はないかと考えたが、すでに最高裁で下された刑期に服しているブレイクのそれを短縮することは、自らも服役している身にとり不可能であった。残された



道は彼を脱獄させることのみ。しかし、そのような経験もない二人にとり解決の道はあまり考えられなかった。が、その相談にのったのが、ショーン・バーク。

計画を詳細に検討し、二人は出獄後、見事脱獄させることに成功した。先述のように事件は、スコットランド・ヤードを始めとする官憲の厳しい捜査にも関わらず、解明することが出来ず、恐らく KGB の仕業であろう、という結論に達していた。

しかし、その後、犯罪者引き渡し条約によりアイルランドへ帰国したショーンは、マイケル、パットとの間に取り交わした約束を破り、1970年ブレイク脱獄事件の手記を表わし10万ポンドで出版社に売りわたした。発売された本「The Springing of George Blake=ジョージ・ブレイク脱獄」には、マイケルやパットの本名は記され

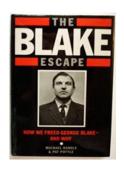
てはいなかったものの、スコットランド・ヤードが目安をつけるには十分すぎるほどであり、間もなく

マイケルとパットは事情聴取を受けた後、裁判にかけられることになった。

1991 年 10 月に行われた二人の裁判は、世の耳目を集めるものであった。二人は、弁護士を用いることなく自らの弁護を自らの手で行ったのである。彼らの陪審員に対する最終弁論は誠に見事なものであった。

陪審員へ向けた判事の最終弁論は、二人の有罪を強く示唆するものだったが、陪審員は全員無罪の評決。1989 年、裁判に先立ち二人はショーンの手記の誤りと自らの心情を表明するため

「The Blake Escape, how we freed George Blake - and why」という本を出版し、ジョージをいかにして且つ何故に脱獄させ、東ドイツへ密出国させたかを詳述している。 1970 年カナダのバンクーバーでふとしたことから広島デーの集会に参加し、現在の



妻と出会ったが、その父親が良心的兵役拒否者 (Conscientious Objector)として戦時は刑務所へ収監され、 戦後は Direct Action Committee (DAC), Committee 100, Operation Gandhi などの創立者の一人であったことや、そのつながりでマイケル・ランドルからいろいろ話を聞くことが出来たのは、まさに奇縁というほかはない。そのうち、マイケルとパットの著作を日本語で出版したいと思っている。

*ジョージ・ブレイク (ロシア在住), マイケル・ランドル (ブラッドフォード大学で教鞭をとり、現在同地に在住), パット・ポトル (2000年 10月死亡。62歳)



銭 湯

岡部道

もうすぐ兄の命日である。蓮の花を大きくキャンバスに描きながら思う。蓮の基(うてな)で こどもになって昔のように兄と遊べるなら逝くのもいいなと。兄が大学4年生の時1年生で田舎から上京したばかりの私は兄と一緒にアパートで暮らすことになった。長兄としての兄はずいぶん責任を感じていたのはよくわかった。東京に着いた晩に銭湯という所に連れて行ってくれた。入り口で「左の入り口の戸を開けると高いところに番台といって人が座っているからそこでお金を払う。入ると奥にかごがあるからそれに脱いだ着物を入れて次の戸を開けると湯ぶねだから」と説明してくれた。私には虎穴に入るよりも怖いはなしである。「あん



イラスト: おかべ

ちゃん、一緒に行って」と頼んだけれどそういうわけには行かないという。田舎では風呂に入らなければ寝てはいけないと育ってきたのだからどうしても入口の戸は自分で開けなければならない。数えてみれば 58 年前のことになる。と今までたくさんの戸を開けて来た。開けなければならない戸は生きている限り続くようだ。

今月9月の俳句の会の季題は「うそ寒」。兄は酒が好きだった。

うそ寒や兄の墓前に缶ビール



キング悦子

気が付けば

気が付けば うたたねしてた 離陸前 気が付けば いつの間にやら 隠居の身

我が背丈 ダウンサイズの 事始め 気が付けば 父の寿命を 超えにけり 気が付けば 読めても書けぬ 漢字増え

白髪見て 席譲らるる バスチューブ 眼が窪み 義眼嵌めたる 心地かな 気が付けば 保留のファイル ごみとなり 気が付けば 簡単料理 ばかりなり 気が付けば アナログ終わり デジタルへ 気が付けば アイティー難民 鬱のもと

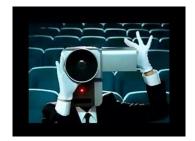
我こそが 断捨離したい 気分なり 終活の カウントダウン 始まれり シャカリキで 生きてた頃が 懐かしい



映画の技法と映画美学の成り立ち

渡邉道英

映画は現実を出来るだけ忠実に再現しようという性格を最初から持っていた。この点を映画あるいは映



像の本質として「現実的性格」をあげる理論家は多い。コンラート・ランゲもその一人である。彼は映画を、写真という機械的操作によって現実の運動する事物を客観的に模写するだけのものであるとし、そこには人間の想像力が働く余地もなければ、創作家の個性が現れる可能性もないと考え、その創造性を否定したのである。またアルンハイムは映像が現実と非常に似通っていることを指摘し、安易に作られた映画は現実そのままの引き写

しになる危険があるから、映画が独特な映画作品を作り出す為には、むしろ映像と現実の間の相違に着 目し、それを強調しなければならないと言っている。

ところで、映像はカメラによって作り出されるものである。カメラは対象を、客観的にフィルム (DVD) に固定する。そしてフィルムは映写機 (DVD 再生装置) によって、そのままスクリーン上に映し出される。 映像は映されるもの殆どそのままである。これに対して絵画の場合では対象と絵の間に、画家の目、手などの主観的要素が介入するので、どのように忠実に描こうとしても (例えばレンブラント、クールべなどの作品) 対象と絵の間には等式は成立しない。

さて、「現実的」とはどういうものかをもう少し考えてみる必要がある。辞書には①現に事実としてあるもの。ありのまま。②思惟の対象である客観的、具体的存在とある。ところが通常、私たちが実際の生活の中で自分の目、耳などの感覚で捉え、いろいろな仕方で体験したものが、一般に言われる現実なのです。つまり体験的現実なのです。例えば私たちは目でものを見る。しかし人間の目は決して一様なものでは無い。もちろん視力の強い人、弱い人などの違いもあるが、「注意深く見る目」や「ぼんやり見る目」などと言う違いもある。『目の肥えた人』という言葉があるように人間の目は、その人の性格、体験、環境などによって規制される。その上、私たちは見えるもの全てを見ているのではない。今、視野の中にある一つの物が、私たちの興味を特に掻き立てたりすると、私たちの意識はそれにだけ集中し、他の物は意識から消えさってしまう。つまり人間の目は無意識に現実の中から都合のよいものを選択して見ているのである。

カメラの目(レンズ)には、このような個性による規定が無い。「カメラは目の前にあるもの全てをそのままに」見る。私たちの見るものと、映像の間には明白な相違がある。映像は私たちが気ずかないもの、思いがけないものを示してくれる。映像は私たちが主観のヴェールを通して見ていたものを、むき出しの姿で示す。映像が現実的であるということは、体験現実の再現を意味するのでは無い。日常生活で私たちが気付かずに過ごしている、或いは私たちから隠されている周囲の世界の姿でありその意味で「現実的」なのだ。実際の出来事を忠実に再現した映像であっても、それは場所的にも時間的にも、選択され限定された結果なのだ。日常生活での世界は雑多なものが入り混じり私たちの目はそこで方向を見失い、迷い彷徨う。目をあやまたず事物の核心に導くために、雑多な核心的で無い要素や部分を捨て去る。この意味から選択や限定は映像形成の主要な要素なのだ。

次に、映像は矩形のスクリーン上で見られる訳だから、二次元の空間と言える。従って、この視覚的 二次空間の性質は、絵画と同類と考えられる。同時に映像も絵画も想像上の三次元の空間を持つことか らも全く同類と考えられる。著名な絵画作品からヒントを得たり、構図をそのまま借用して映像を形成 した映画作品もかなりあります。例えばフランス映画の名作『女だけの都』(ジャック・フェデー監督)

などは、冒頭のサブタイトルにも記されているように、「フラマン派」 の絵画を参考にした映画であった。ピーターブリューゲルによって代 表されるフラマン派の絵画を参考にした作品で(当時のフランドルの 街を再現したものとあって)映画のどのシーン、どの一コマを取って も、その豊饒な絵画的な構成は素晴らしいものであった。



しかしながら、絵画の空間は完結した空間、自足的な空間であること。

画家がカンバスに描くものは日常生活を剥ぎ取られ、デフォルメされ、新たにまとめあげられた日常生



活とは全く別の世界なのである。例えばレンブラントの様に背景を暗く描くことによって奥へ沈んでいく空間を表す場合でも、空間は絵の中での無限の奥行であり、それ故にこそあのような神秘的な印象を与えるものと思う。逆にレオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』のように、巧みな遠近法の採用によって、絵の中の空間が絵のある部屋の空間と直接連続しているかの如く描かれたものもある。しかしこの場合でも絵画空間が外部空間へ広がっていくのではなく、見る人の視線を絵のみに集中させ、いわば室内の空間を絵画空間の中に吸収し凝縮するような性質を持つと言われている。この

ような絵画空間に対して、映像空間はある連続する外的空間からその一部を切り取りとることによって成立する。つまり外的空間と直接の関係をもった空間である。それは映画の空間の技法からも逆に立証できることだ。移動撮影やパン、トラヴェリングなどのカメラ技法はまさに映像空間の連続性ゆえに可能なのだ。映像空間の特殊な性格を物語る技法として、さらにクローズアップが考えられる。クローズアップ(close-up)は映画の最も重要な技法であり、ベラバラージュなど数多くの理論家によって、既にその表現状の意味、機能が分析されている。

それはさておき、私たちが映画を見る時、力強く働きかけてくるのは時間的要素であろう。映像は確かに二次空間一平面としての性格を持っているが、同時にそれはある運動を持つものであり、ある時間的な長さを持っている。次の瞬間には、一瞬前の空間の変化した結果であり、次の瞬間には別の空間を生み出すように定められているのである。つまり必然的に伴った瞬間の連続として考えられる。それはとりもなおさず時間の流れなのである。結局、映像の空間はそれが成り立つためには、ある時間の流れを必要とする。つまり映像空間はそれ自身のみではあり得ぬものである。それは明らかにある時間の流れが、その瞬間瞬間に生み出していくものと考えられる。その意味から、映像の空間は動的な性質を有すると言うことができる。このように映像はそれ自身ある独自の時間の流れである、と同時にそれが具体的事物の再現であることから、ある具体的な時間の流れを表すことができる。

さてそれでは映像の表す時間にはどんな性質があるのか、ここで言語の「自制」と言う概念を取り入れ映像の時間の性質を考えてみる。言語は様々な種類の自制を持っている。大きく分ければ、過去、現在、未来の三つだが、フランス語などはそれはさらに複雑に区分されてる。そして時制が複雑になれば

なるほど変化に富んだ微妙な時間を表現することが出来る。それでは映像にも言語のように複雑かつ多様な時制があるのか、いえ残念ながら映像はこの点については非常に貧しい。映像には「直接法、現在」だけしか無い。なぜなら映像の性格である再現性に基ずくからである。つまりカメラは、現に自分の前で生じている出来事しか見ることが出来ない。過ぎ去ったこと或いは未だ実現できないものをカメラは見ることができないのである。このように映像は現在形しかないのだが、このことは映画が現在しか表現できないと言う意味では無論ない。映画は現に色々な技法により過去、未来等を自由に表現している。例えば回想形式をとる映画がそれである。しかしながらこの回想の部分をつずる映像の時制はやはり現在でしか無い。つまり過去を過去形で表現するのではなく、現在形で表わされた出来事を観客が過去の出来事だと判断して見ているのだ。このように単一の時制しか持たない映像は、言語に比較して非常に貧しいもの、単純で自由さを欠くものといえる。名作の小説といわれる映画化が、しばしば凡庸な結果に終わるのも映像が原作の複雑

かつ微妙な時間表現を完全に描くことが出来ないからであろう。逆説的に言えば『小説の映画化』と言うこと自体が邪道であり、たまたま小説から素材を得た映画はあっても、小説そのままを映像化すると言うことは考えられないことである。

ところで、映像の時制は貧しく自由に欠けると言ったが、映画には映像の特質を十分に生かした時間表現もある。高速度撮影や微速度撮影の効果がその代表例であろう。これらの特殊撮影は科学映画に多く用いられ、植物の花の咲く状態を僅かの時間で再現したり、野生の動物の生態を見せてくれたりする。これらの技法は科学映画のみならず一般の映画にも「夢」とか瞬間的動作の表現として用いられる。典型的な例として、フランス映画におけるヌーベルバーグに多大の影響を与えたと言われるジャン・ヴィゴ監督の代表作『操行ゼロ』の中の高速撮影による映像を思い出す。これは寄宿舎の少年たちが、醜く



て不公平で残酷な大人たちに反抗し、羽根蒲団の羽根を撒き散らせながら寝室を行進するシーンであるが、飛び散る羽根のゆったりとした動きが、いかにも少年期の愛すべき反抗の行為として、幻想的な気分と一種の詩情を与えてくれた。

この他、まだまだ映像が持っている意味など研究していくと、深 みのある映画が出来てしかるべきだが、最近の若い世代は TV・ア ニメなどで自然に育った世代で、無頓着に映像に接していて「映画 論」「映画史」などを学んでいる人が少ないと思われる。従って映

画に深みが感じられず、惹起されるものが少ない。大いに学んで、我々半世紀前の映画青年たちに立ち 向かってきてほしいものだ。



老いの効用

石山望

思い切って、電話の番号を、恐る恐るとながら丁寧に押した。でも、心配であった。

何しろ、最後に話してから30年くらいは経っている。どういう対応をされるであろうか。電話番号が変

わっているかもしれない。または、状況がコロリと違っているかもしれない。全 く、知らない人が出てこられるかもしれない。

お目当の人が出てこられても、会話を拒否されるかもしれない。いいところ、会話はできても、非常に冷たい反応が返ってくるかもしれない。

私、日本を出てから42年。

しかし、その前の京都での数年間は、口にするのも憚られるほど、実に荒んだ生活をしていた。

その時は、阪急沿線の東向日に住んでいた。別に勤めていた訳でもないのに、四条河原町までの定期券を買い、夜な夜な、繁華街に繰り出し、飲み歩いた。そして、終電車に乗り遅れると、4時間くらいかかって、歩いて帰った。

まあ、タクシー代など持っていないし、また、そんな生活をしていた自分を懲らしめるという意味もあったであろう。

その様な泥濘の生活に身を任せるということには、勿論それなりに理由があった。一生に一度の大恋愛があったのもこの頃のことである。酒は昼からでも飲んでいたし。

当然のことながら、そういう生活を送っていれば、いろんなところで、帳尻が合わなくなるものである。 人様に、そして何よりも自分に嘘をつき、自分をまっすぐに見つめるということをしないで、いつも酒 で、頭をボヤ〜ンという状態にしていた。

それやこれやで、失敗に失敗を重ね、人様に多大のご迷惑をおかけした。挙句、自ずと「あの人は、訳のわからない人」という風評がたってしまい、多くの方が私の許を去って行かれた。事情はわかるけれど、とても寂しかった。

「四面楚歌」とは、正にこのことである。

その時、私の悩みを打ち明けられる人など、どなたもおられなかったので、無期限のヨーロッパ放浪の旅に出ることにした。人生を一からやり直すために、、。

今日お電話したのは、私がその頃に知っていた女性である。

女性といっても、彼女その時まだ中学生。可愛らしく、またしっかりした子であった。

私の不埒な私生活とは裏腹に、私、この子の家庭教師をしていた。

彼女のみならず、彼女の兄弟二人の面倒も見ていたので、彼女のご家族とは縁が深いということになる。 このご家族の皆様には、いろいろお世話になった。また、ご迷惑をおかけもした。

今、手をついて謝りたいくらいであるが、ご両親は遠におられない。

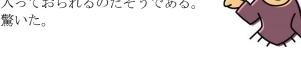
しかも、私、その後、突然、日本を離れ、帰って来なかったのであるから、皆様、さぞ、不可解な思い をされたことであろう。

嬉しいことに、今日、彼女と喋る前に抱いていた「懸念」は「杞憂」に終った。彼女、とても喜んでくれた。

彼女、60歳。結婚歴があり、ご主人はだいぶ前に亡くなったのだという。また、私も知っている彼女の兄は、若年性の認知症で、施設に入っておられるのだそうである。 もちろん、私、これらのことは何も知らなかった。驚いた。

時は流れ、人生は流転する。

人は必ず老い、容色衰え、機能は劣化する。



しかし、その代償として、いろんなことが鮮明にわかってくるというのも事実である。これが、「年を取る」ということかも知れないと、私は密かに思っている。

今年もまた、日本に帰る。

実に久しぶりに、枚方に行き、彼女に会うのを楽しみにしている。お兄さんを連れ出し、食事に行く。 私、毎年日本に行くのは、いろんな方々にお会いするためである。このように「旧交を温め」、「懺悔」 そして「近況報告」をするためである。

近年、非常に永い空白の年月を経て旧交を温めた日本人のお方が、他にも何人かおられる。 何れも京都でのこと。私の懸念に反し、どなたも、私との再会を殊の外喜んで下さった。今年もまたお 会いする。皆様、何がしかの問題を抱えておられるけれど、一所懸命に生きておられる。

「年を取る」ということには、悪いことばかりあるのではない様である。



母の日

今年、3月11日は、「母の日」でした。日曜日。

ただし、それは、英国での話で、日本では、5月の第2日曜日です。ですから、今年は5月 13日ということになります。



実は、私、恥ずかしながら、漠然と、「母の日」というのは、世界共通、一年の同じ日 だと思っていたのです。

しかし、これは間違いもいい所。世界的に見れば、2月から12月まで、殆んど一年中、何処かの国で「母の日」というものがあることになります。ただ、その意味合いは少し違う場合があり、例えば、カソリックの国では、「聖母マリアの日」とか。でも、圧倒的に多いのは、やはり、5月の第2日曜日ですね。これは、アメリカに端を発します。

20世紀の初頭は、「女性の権利」ということが高らかに叫ばれた時期で、それは、主にロシア及びアメリカでのことでした。その結果、3月8日が「国際女性の日」に制定され、これは、今も連綿と続いています。当然のことながら、世界共通です。

それの延長線上で、英国では、その頃、「女性に参政権を与えよ」という運動が盛んになり、それは、女性だけの運動であるにもかかわらず、次第に過激化して行きました。そして、条件付きながら、英国女性に初めて投票権の与えられたのは 1918 年のことでした。

20世紀初頭のこれらのことに関連して、「母の日」というものも出てきたのですが、その詳細は省きます。ですから、「母の日」というのには、その背後に永い歴史があります。そして、誰でも、一般に、母親と呼ばれる人達が、主にその子供のために、また家族のために、どれほど尽すかということはよく知っていますね。

従って、「母の日」という日のあるのが、私には、実に自然なことの様に思われるのですが、いかがでしょうか。

「陰の功労者」といいますか、「縁の下の力持ち」といいますか。

そういう存在である「お母さん」が、まあ、すくなくとも年に一回くらい、公に「顕彰」されて、当然 だと思います。

そこへ行くと、「お父さん」というのは、いつも、普通「表」に出ておられる存在なのだから、「ハイ、お父様、言葉に出しては申しませんが、いつも尊敬致しておりますよ。感謝しております。」

そんな時、もし、敢えて「父の日」という日があるとすれば、私は、何か、そこに「不自然さ」を感じてしまいます。「座り心地の悪さ」といいますか。何か「義理チョコ」みたいな感じ。態々、「特別の日」というものがない方が、私はいいと思います。それとも逆に、昨今のお父さんというのは、こういう「父の日」というものでもないと、浮かばれない存在になってしまったということでしょうか。

私の母は、私より歳上で、その年齢差42。明治36年の生まれでした。

私は、5 人兄弟姉妹のうち、戦時中に生まれた末っ子。上の4 人は、10 年間に順調に生れていて、その10 年後、両親が忘れかけていた頃に、「まさか、それは、ないやろ」と言いながら、私が、生まれてきたのです。

まあ、おそらく油断していたのでしょうね、私の両親。

ただ、終戦間近とはいえ、何しろ戦時中、男の子の誕生は、喜ばれた様なのです(私、この論理は、あまりよく分りません)。

まあ、子供の思いがけない誕生、それも、男の子だったので、両親も嬉しかったのでしょうね。大変大 事にして私を育てて下さったと思いますよ。

ただ、その 7 年後に、父が死にましたので、あとは、私、一寸年老いた母親に育てられるということになってしまいました。幸い家業というものがあり、生活には困らなかったのですが、私といえば、不在の父を恋しがるばかりで、母によくするというところがなく、今にして、悪かったなと思います。母も、さぞ寂しかったことでしょうに。

その母も、どちらかといえば若死で、彼女 66 歳の時。私、その時、24 歳でしたが、そういうわけで、 私、母親と「大人の会話」というものを交わしたことがありません。まあ、兄姉の誰とも、事情は同じ でしたが、。

「アナタさあ、偶には、お化粧ぐらいしたらどうなの? 着物ばっかり着ていないで、洋服着てみるとかさあ、」とか、「アナタ、僕のお父さんとは、お見合い結婚したんだろうけれど、ケッキョク、あの人のどこがいいと思ったワケ?」とか。

ですから、私、母のことを、本当に知っていたとは思えません。また、母も、私が、本当の所どういう男なのか、知らぬまま死んで行ったということになります。親子って、そんなものなのでしょうかねえ。まあ、その頃、私は、母親の存在というものを、いわば「当然視」していて、我がままばかり言っていたのでしょうね。

今にして、本当に悪いことをしたと思います。母の気も知らないで、。

しかし、この母親のことに限らず、「ああ、あの時、こうしておけばよかったな」と思うというのは、この頃よくあります。

人間、ある程度歳を喰ってくると、いろんなことが少し分るようになるもののようですね。私、それを、最近一人になってから、殊更顕著に感じます。 ああ、しかし、そういうのが分っても、気がつくと、もう 73 歳ですか。

「人生」って、何だか、とても短いんですね。





英国春秋俳壇

俳句同好会

夏帽子

競馬場洒落た婦人の夏帽子 日射し増すいよいよ出番の夏帽子 夏帽子傘の内なる効果あり 日盛りに花の小陸で歌を詠む

きつね達お昼寝時は路の蔭

街の中日傘と行き交う夏帽子 にわか雨必死に抑える夏帽子 風誘う市の風鈴にぎやかに 生ぬるき夕立の風感じおり

帰国する荷物の上に夏帽子

ぶかぶかの表わら帽子孫笑顔 ぼうふらのダンスに見とれ時忘れ 夏帽子蝶にかぶせて母呼ぶ子 夏草にそよ風わたる別れかな 日盛りの鎮守の森のほの暗さ 日出美バンダースケイフ田口邦子

藤原さかえ

福重久子

小野宣美 川西弘子 上田陽子 タミーガフニー 葉子デニヤ

千津子ウインター 松尾美和子 岡部道 広瀬信子 由美ウイーラー



英国春秋俳壇

エリオットつや子

朝顏

みるみるに草を埋めて雪積る ゆで卵むけばタンポポわたげ飛ぶ 鬼百含の長いまつげの花粉濃し

冷やしそば椀に盛られてかしこまり

朝顔にふんわり向心ぼいてくる

朝顔に水のにおいの風流る

朝顔に白くうるわし部屋ありて

朝顔や一雨きそうな西の空



夏やせの猫に与えるミルク椀 いつはじく椨の実まんまる淡みどり

食欲の秋に楽しむ「英国の口福」

マクギネス真美

在英邦人のための日本語情報誌『英国ニュースダイジェスト』にて「英国の口福を探して」というコラムを連載させていただいて3年以上になります。先日、連載第80回の原稿を書き終えて、紅茶を飲みながらほっと一息。我ながら、よくもまあ、80種類もの英国のおいしい食べ物を調べ、食べ続けてきたものだと思いました。

991

林望氏の大ベストセラー「イギリスはおいしい」が 出版されたのが1991 年ですから、それから27年。いまだに「イギリスの食べ物はまずい」という人もいるようですが、在英の皆さんであれば、近頃のイギリスで口にすることのできる料理の、国際色の豊かさ、そのレベルの高さはよくご存知なのではないかと思います。

また、テレビで放映される料理番組の多さや、出版されている料理書のバラエティに富んだ内容を見ても、イギリス人は「食」に大いなる関心がある人々だと言えるのではないでしょうか。

私がコラムでご紹介しているのは、どちらかといえばイギリスで古くから料理され、親しまれてきた食べ物。そしてそれらは一般家庭で作られていることが多く、おしゃれなレストランなどではメニューにのぼらないため、観光客にとっては出会うチャンスが少ないものもあるかもしれません。

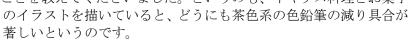
幸いなことに、私の義母は料理上手で教え上手。また、義母の母は英国軍のコックをしていたこともあるという、やはり料理上手の人だったようで、私は、機会あるごとに義母から、家庭に伝わるイギリス料理のレシピを教わっています。

義母は、結婚当初から書きためているという、万年筆で手書きされたレシピノートを取り出してきては、「私の母は、バターの代わりにマーガリンを使っていたけれど」などと、私が会うことのなかった義祖母の思い出話とともに、レシピを説明してくれることもあります。彼女と一緒に料理をすると、食べ物の話だけでなく、イギリスの伝統や、昔の暮らしぶりなどを聞くこともでき、とても楽しいひとときです。

言葉も習慣もまったく違う国に生まれ育った義母と私ですが、料理を通じて、より絆が深まったような気もします。もちろん、嫁姑の確執など起こりようもなく、「英国の口福」は「英国での幸福」をも、もたらせてくれているようです。

さて、そんな「英国の口福」とは、どんなものかというと。。。たとえば「バブル&スクィーク」「トード・イン・ザ・ホール」「ポーク・パイ」「シェパーズ・パイ」など。日本に住んでいるときには、食べたことはもちろん、見たことも聞いたこともなかったような食べ物がほとんどです。それらをイギリス人義母に伝授され、さらに、取材をしたり書物で調べる。そして、自分でも試作、試食を重ね、日本人読者の皆さんにご紹介することができるのは、とても楽しい仕事です。

コラムには、毎号ご紹介する食べ物に合わせたイラストが添えられているのですが、イラストを担当 してくださっている N さんが面白いことを教えてくださいました。というのも、イギリス料理とお菓子



確かに、「フラップジャック」「ファット・ラスカル」「パーキン」に「ボイルド・ケーキ」などをはじめ、お菓子にしても、料理にしても、イギリスの食べ物にはブラウンがかった色味のものが多いようです。

でも、考えてみれば日本の料理にも茶色いものがたくさんありますよね。かつて、ホームステイ先で日本の家庭料理を食べてみたい



とリクエストされたとき作ったのが、お味噌汁、肉じゃが、きんぴらゴボウと鯖の味噌煮、鳥の唐揚げ。 テーブルの上に並んだ料理が、見事に茶系のグラデーションだったことを思い出します。

イギリス料理と日本の料理。まったく違うものですが、色味に共通点があるとは、ちょっと楽しい発見です。

せっかくなので、今回はまさにその「茶色」を代表するようなイギリスの食べ物、リンゴのチャットニー(チャツネ)のレシピをご紹介します。名前は、ヒンディー語でソースを表す「chatni」からきていると言われます。インド帝国が英国領だった時代に、カレーなどの食物と同様にイギリスにもたらされたものだとか。現地ではマンゴーやタマリンドなどが使われていたものの、イギリスでは、国内で採れるリンゴやプラムなどの果物を使ったバージョンへとローカライズされていったようです。

イギリス人はチャットニーを、チーズやハムなどとサンドウィッチに入れたり、ソーセージなどの付け合わせにもします。ほんの少し付けることで、ほかの食品の味を引き立てる、いわば薬味的存在。庭にリンゴを植えてある家庭が多いイギリスでは、かつては、今の時期になると、その秋の実りを使って、せっせとチャットニー作りをしていたことでしょう。

私はといえば、十数年前に義母から可愛くラッピングされた手作りのチャットニーをプレゼントされて初めてその食べ方を知り、すっかりお気に入りとなりました。義母の母から伝わるレシピで作ったそれは、お客さんが来た時、ディナー後、チーズを食べる際に出すと、大抵の人から「おいしい」と言ってもらえる自慢の一品です。といっても、材料を切ってただ煮込むだけ。イギリスらしく(?!)シンプルで簡単なレシピです。

日に日に暮れるのが早くなってくるイギリスの秋の夕べに、コトコトとお鍋で煮るリンゴのチャットニー。茶色で地味な食べ物ではありますが、私にとっては間違いなく「英国で出会った口福」のひとつです。

*アップル・チャットニーの作り方(350g 用の瓶4~6 個分)

材料:

リンゴ • • 900g 玉ねぎ • • 450g サルタナ (干しぶどう) • • • 225g 生姜 (すりおろして使用) ・・・ひとかけ 塩 ・・ひとつまみ 砂糖 • • 450g モルト・ビネガー • • • 570ml ピクルス用スパイス (Pickling Spice) • • • 30g



作り方:

- 1、ピクルス用スパイスをガーゼで包んでおく(使い捨て用のティーバッグなどに入れても可)。
- 2、リンゴと玉ねぎを小さめに刻む(大きさは好みによりますが、みじん切りよりはやや大きめくらいがいいようです。フード・プロセッサ使用可)。
- 3、2にモルト・ビネガーとスパイスを加え、沸騰するまで煮立て、沸騰後は火を弱めて 1 時間ほど煮込む。
- 4. 砂糖、サルタナ、塩、生姜を加え、この段階でスパイスを取り出す。 再度、沸騰させ、30 分ほど 煮込む。砂糖が多いので焦げないように、ときどきかき混ぜる。
- 5. 水分が減ってとろりとした感じになり、全体がこい茶色になっていればできあがり。チャットニーが温かいうちに煮沸消毒した密閉容器に入れて保存する。

不当な扱いを受けた主人公 リゴレットとシャイロック

小川のり子

小説の主人公の生き様は作者の意のまま、生かすも殺すもそのペンひとつにかかっている。もう少し彼らに"チャンス"と願っても、生みの親は時には非情そのもの、読み手の思いなど全く忖度してくれない。人生には浮沈がつきもの、小説の主人公だって人並みに、不幸の後には幸せを、悲しみの後には喜びを願うのが自然。しかし作者のペン先は、彼らを次々と情け容赦もない過酷な運命へと追いやってしまう。特に、これから述べようとするリゴレット(オペラ「リゴレット」)とシャイロック(「ヴェニスの商人」)の人生は、再起不能かと思われるほど不幸・不運の連続。これではあまりにも不公平、「彼らは不当な扱いを受け過ぎた」と言うのが作者への苦情でもあり、言いがかりでもある。



リゴレットはマントヴァ公爵の道化で、その辛辣な口ぶりで公爵を楽しませるが、宮廷では敵が多い。彼が命よりも大切にしている娘を公爵の廷臣たちに誘拐され、挙句の果ては好色な公爵に犯され、捨てられてしまう。復讐を誓ったリゴレットが、殺し屋に公爵殺害を頼むが、その計画を盗み聞きした娘が、「彼の身代わりに私を」を望み、結局彼女が殺されてしまう。公爵の死体が入ったと信じた袋を殺し屋から受け取り、川に投げ込む寸前、袋の中から愛する娘の声が聞こえてくる。瀕死のジルダを目前にリゴレットは天を呪って号泣する。

原作は「レ・ミゼラブル」の作家、ビクトール・ユーゴー。オペラ用にヴェルディとピアーヴェが、フランスの宮廷からイタリアのそれに、フランス王からマントヴァの公爵にと書き直したと聞く。オペラ版では特にリゴレットの生きざまに重点が置かれたそうで、彼の不幸の連鎖が強調されたのかもしれない。そのために、あるオペラファンから「気の毒過ぎる」というクレームがつくことを予想だにしなかったとは思うが。

オペラは3幕で正味2時間半、その間、リゴレットが喜んだり、楽しんだりする場面は皆無。しいて言えば隠れ家の娘に会いに来るシーンだけである。彼は知らないが、既に娘、ジルダは公爵(と知らずに)と教会で出合っており、父親が許さないであろうことを知りながら、淡い恋心を抱いている。こうして最愛の娘にも彼女の世話を任せていた乳母にも背かれ、宮廷の仲間にも雇い主の公爵にも裏切られ、最後はカネで雇った殺し屋にさえ騙されてしまう。その上、だれのせいとも言えないが、せむしという不具の身である。話が少々横道にそれるが、"せむし"は差別用語とかで使わぬ方が良いらしい。代わりに"畸形"と呼ばせるテキストもあるが、これでは何だかよく分からない。それに同じ原作者の小説「ノートルダムのせむし男」はどう呼べばよいのかと少々気になった。

劇中でのリゴレットが、「ええい、忌々しい!畸形であるとは! 道化であるとは! してはならぬ、出来もせぬとは、笑うほかに!!」(小瀬村幸子訳)と自嘲を込めて歌うアリア、廷臣たちに普段の辛辣な口ぶりを抑えすすり泣きながら、「旦那方、お許しを、お慈悲を…、わしに娘を返してくだされ、この娘が手前にはこの世のすべてでございます。慈悲を、旦那衆、お慈悲を」と懇願するアリア、そして最後の、「死ぬな…私の宝よ、後生だ…私の小鳩…お前が飛び立てば…私はここに一人残るのだぞ…死ぬな…でないとわしは今もうお前と死ぬ!ああ、娘よ…ジルダ!わしのジルダ!…死んだ!…ああ!あの呪いだ!」と悲痛な声を絞り上げて息も絶え絶えのジルダとのデュエット等、これらがリゴレットに次々と降りかかる不運・不幸を強調し、聴衆の同情をより深めていく。

リゴレットの欠点といえばその辛辣な口振りで、これが仇となりある伯爵の呪いを受けてしまう。そのためか次々と襲ってくる不幸の矢玉を受けて、最後は満身傷だらけのリゴレットをこのまま見放してしまうには忍び難く、作者達から叱責を受けるのを覚悟で、幕外の付けたしを試みた。

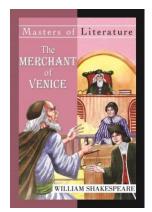
娘の乳母、ジョヴァンナが、公爵をジルダの家に手引きしてしまった悔恨の念から、すべてを失ったリゴレットを何かと世話をして慰める。宮廷の勤めから身を引いてマントヴァの郊外に移り住んだ彼は、

不具の身を嘆くこともなく、仲間の嘲笑からも逃れ、公爵の好色な魔手から娘を守る心配もなく、ジョヴァンナの献身的な世話のもとに余生を送る。さて、そのリゴレットの老後に何年の執行猶予を与えるべきかと、「最後の審判権」を今度は、私が作者に代わって楽しんでいる。

さて、もう一人の不運な主人公は、「ヴェニスの商人」でお馴染みユダヤ人の金貸しシャイロック。 以前、『英国春秋』でこの作品のもう一人の主人公、ポーシャについて書いたが、その彼女のおかげで今 回の主人公シャイロックは2度と立ち上がれないほど打ちのめされてしまう。

粗筋は省くが、金貸しシャイロックから、ヴェニスの商人アントーニオが"自身の人肉一ポンド"をかたに借金と言うのがメインのプロット。人間の思いは時には豹変するので面白い。前回はフェミニストのポーシャを主人公に、富と美貌を両手に才気煥発、シェクスピア劇では第一の才女と褒めあげた。今回は裁かれるシャイロック側に回って、彼女への評価は急転落下。まさに「白人女の思い上がり、苦労知らずのわがまま娘の不公平な裁き」と読めば読めなくもない、まさに180度の変心である。

あの有名な人肉抵当裁判で、男性の裁判官に扮した彼女は、「さあ、肉を切り取る用意をするがよい、ただし、血を流してはならんぞ。また、切り取る肉は正確に一ポンド、それ以上でも以下でもいけない。仮に一ポンド以上、又は以下の肉を切り取れば、たとえその軽重の差が一ポンドの千分の一、いや、そのま



た二十分の一にすぎなくても、とにかく、秤が髪の毛一筋ほどの傾きでも見せたとすれば、その身は死 刑、財産はことごとく没収することになる」(小田島雄志訳) と過酷な判決を言い渡す。

実はこの判決の前に色々と仲裁案が持ち出される。シャイロックから金を借りた側が、二倍、いや十倍にして返してもよいからと申し出るが、彼は頑として受け付けない。そして、「・・・あなた方はおおぜいの奴隷を買いとっておいでだ、そして牛馬同様、卑しい仕事にこき使ってらっしゃる、それというのも、金を出してお買いになったからだ。・・・汗水流しての重労働はかわいそうではありませんか?ベッドはあなたがたと同じ柔らかいのもにし、食事も同じごちそうを食べさせては?きっとあなたがたは、「奴隷はおれのものだ」とお答えになることでしょう、私の答えも同じです。私の要求する一ポンドの肉は高い金でかったもの、だからちょうだいするのだ。ならぬと仰せになるのなら、法律も糞もないことになる!ヴェニスは闇だ。ぜひともお裁きをお願い致します」(小田島訳)とシャイロックは開き直る。

この時代、ヴェニスでの奴隷の扱いがどんなものであったか知らないが、"生かさず殺さず"とぎりぎりの線上であった場合を思えば、人間というより金で買った物扱いである。そこでシャイロックは前述の「煮て食うおうと焼いて食おうと」の道理を持ち出す。が、人の命が絡めばそうは許されないことは百も承知のはず。貸した金が"人肉一ポンド"として返ってくるかもという事は、シャイロックにとってどういう意味合いがあったのだろうか。日頃よりユダヤ人として差別され、しばしば人間以下の屈辱的な扱いを受けてきた彼。ヴェニスの商人たちの思い上がりに対し、「ユダヤ人には目がないか?手がないか?五臓六腑、四肢五体が、感覚、感情、情熱がないとでも言うのか?キリスト教徒とどこが違う」(小田島訳)と憤怒に燃えて叫ばせる場面がある。それは復讐の念に駆られた彼を、この非常識な取引に走らせてしまった理由の説明であるのかも知れない。

この後、シャイロックはポーシャの容赦のない判決で、せめて元金だけでもと懇願するが、全て拒否される。最終的には、貸した金はビター文も返って来ない、財産は半分没収、遺産は娘を連れ去った婿に譲渡、その上に、即刻ユダヤ教を捨てろと無茶な判決。いくらシャイロック嫌いでも、これではあまり酷すぎるというのが私の思いである。特に宗教についての裁きは"力でもって人々をキリスト教に改宗させる白人の思い上がり"がまともで、どうも後味が悪い。ユダヤ人達は、差別意識の強い異国で生き永らえるには、自身のアイデンティティを保つ最善の道、民族宗教ヤハウェの神に深く帰依して行くことしかないと固く信じているはず。"XXは食べてはいけない、安息日は働いてはいけない、ラビ文献の研究をしなくてはいけない"等、信仰・教義より日常の行為・行動に重点を置く彼らにとって、「信じる者は皆救われん」と説くキリスト教とは生活態度からして大きく違ってくるはずである。

さて、改宗を余儀なくされたシャイロックはその後どうなったか、大いに気になる点である。

キリスト教徒として近くの聖ザッカリア教会に通い出したシャイロックのもとに、今まで敬遠していたヴェニスの商人たちも喜んでローンを頼みに群がってくる。中東で香辛料買付を、東洋からシルク織物買付をという彼らの要望に、十分な担保と金利を上乗せして応えたので、彼の財産はみるみる膨れ上がる。駆け落ちした娘ジェシカに子供が生まれ、「おじいさんに顔見せ」と現れたり、その上、密かに"XXは食べない、安息日には働かない"等の戒律をも守り通したりで、「終りよければ全てよし」の人生を送ることになった。と最後の数行は私の付けたしであるが。



「私の楽しみ」

鈴木ナオミ

私の前にはいつも扉がある 目の前の扉を開けると その向うに側にまた扉がある いつも扉は見えているのに 何故か手をかけようとすると なかなか届かない 苦難の連続でも 必死で考えを巡らせ 汗をかき、時には涙を流し やっとの思いでドアノブに触れることができる その扉の向う側は どんな色?どんな景色?どんな香り?どんな幸せ?どんな楽しみ? 希望に満ちた思いでまた扉を押す 見えてくるのは次の扉だ また苦難を繰り返し扉に辿り着く その扉の向う側は どんな色?どんな景色?どんな香り?どんな幸せ?どんな楽しみ? 思えばどの「向こう側」も最初の期待を完璧に満足することはなかった 数えたら幸せの数より苦難の数が多い気がする

いつも心を痛め 悲しみ 叩かれ 心無い人々に苦しめられている それなのに…そんなに大変なのに…いつも「向こう側」に憧れ 全身の力を込めて ひたすら前を突き進むのは何故だろう それは、どうしようもない困難の中で見つける 一筋の光こそが、一人の優しさこそが、一つの笑顔こそが、一生の宝物として私を幸せにしてくれるから。 私は、その「宝物探し」の人生を楽しんでいるのだ 得られた宝物の数は、自分の「人間力」を示すまだまだだ

最後の瞬間は最高の笑顔でいられるように

人間の本当の優しさや生き甲斐は 困難の中だからこそ生まれると信じている これから命尽きるまで「向こう側」に思いを馳せ バームクーヘンのように幾重にも重なった 宝物探しの人生を楽しみながら生きていこう いつかきっと多くの人に拍手を貰える日も来ると信じよう



日本旅行

田村陽子

2018年5月2年ぶりの日本旅行から帰って気付いたこと

その1 コインの重さ

1ポンドと2ポンドコインがいやに大きく、又重く感じられた。

すると "2 ポンドコイン~12 グラム"、"500 円玉~7 グラム"

ロンドンに帰って 2、3 日して近くの八百屋さんで赤くうまそうなチェリーが目に入った。良さそうなのを選り分けて袋に入れキャシヤーに持って行くと、「2 ポンド 80 だよ」とのこと。それで私は 2 ポンドコインを堂々と差し出しおつりを待っていた。キャシヤーはなおも「2 ポンド 80、マダム」と叫んでいる。私は 2 ポンドコインを 500 円玉と思っていたらしい。「アッ、ソリー!」と我に返りさらに 1 ポンドを追加して、丁寧にお詫びをして出てきた。それで家に帰って調べてみた。



と書いてあった。なるほど、どうりで間違えた訳だ。それにしてもこれまで何度も日本旅行をしてきたのに、なんで今になって気になったのか?歳のせいで重さに敏感になってきたのだろうか?

その2 コンビニ



日本のコンビニ、本当にコンビーニエント!行くたんびに種類が増えてお惣菜の味付もなかなか良い。おにぎりの種類も色々あって楽しんだ。又焼き鳥がミニオブンの中でおいしそうに光っていた。たったの 100 円。良い味だった。

ロンドンに帰って間もなくあのおにぎりが無性に食べたくなった。早早速、近くの日本食店へ行ってみたがあいにく1個もない!残念!

人は慣れ親しんだ物に傾くという事だろうか。

その3 shopping

私の旅のスタイルは 機内持ち込みのスーツケース1個と小さなリュックサックだけ。でないとあちこち動き回るのに苦労するから。だから余計な物は持って行かない。今回 book off をあちこちで見つけて、読みたい本や DVD を幾つもみつけた。又マイクロウェーブでゆで卵を作る便利な物をかった。すごく重宝している。又街行く女性が今年の流行らしい、格好の良いパンタロンをヒラヒラさせながら歩いている。私もつられて派手なのを買ってただ眺めている。

ロンドンに戻ってからも買い物のくせが抜けず、つい衝動買いを。反省しきり。

その4 senior チケット

日本三名園のひとつ、岡山の後楽園を訪れるため JR 岡山駅前の一番乗り場へ。後楽園行きが来たので飛び乗った。すると後から老夫婦も飛び乗って私の側に座った。何となく会話が始まって彼等も後楽園に行く事が分かり、彼らの後について行く事にした。入場券売場の手前で、おじさんは「senior は 140 円、一般は 400 円だよっ」と教えてくれた。日本にもシニアの割引があるんだ!と嬉しくなった。彼らは 89 才と 83 才の東京から来た夫婦だった。若い頃はヨーロッパをあちこち旅した。ロンドンにも行ったよ。と懐かしそうに語った。

中に入ると広いこと、広いこと!太陽がまぶしく輝やいている中を歩いて行くと何やら説明している人がいる。それで私達も仲間に入れてもらって、色々説明を聞きながら一時間余共に過ごした。彼はローカルのボランティアガイドとして、何年も奉仕しているそうだ。岡山潘主池田綱政が庭園内のあちこちにある茶室でよんだ和歌をスラスラと暗誦してくれた。茶畑もあった。自ら能を舞った殿様の能楽堂を見た。その日は吉日だったのか何組もの着物姿の花嫁が写真撮影をしていた。江戸時代初期、元禄文化を代表する見事な庭園だった。

その5 美しい景色 小豆島

岡山港から小豆島の土庄港に向った。あいにくの小雨であたりは霞んで何も見えない。土庄港に着いた

頃には大雨でどうやってホテルに行こうかと思案して、観光案内に行くと親切にもホテルに連絡してくれて、まもなく迎えの車が到着。ホテルは高台にあって、途中、ヤシの木の並木が続きホテルに着いた頃には雨もカラリと止んでいた。高台のホテルからは小さな島々が見渡せ、Angel Road と言われる名所が真下に見えた。潮の満ち引きによって島と島を繋ぐ道が見えたりかくれたりするのだ。部屋のバルコニーから朝に夕べに瀬戸内海と其処に浮ぶ島々を眺める事ができ、大満足!部屋にはおいしいオリーブ入りの茶菓子と日本茶が用意されていた。このホテルを選んだ理由



は、海を見ながら入れる温泉と露天風呂だった。こんなに大きなホテルなのにお客は少く、お風呂ものんびりと、食事をする時も海を眺めながら贅沢な海の幸を楽しんだ。

次の日、快晴!観光バスで島巡りをした。小豆島出身の作家、坪井栄の作品、"24 の瞳 "が映画化された時のオープンセット、映画村。

昭和初期の小さな村が再現されていた。懐かしい小学校。木造で下駄箱や、古いオルガン、机…それからオリーブガーデンを見学。地中海性気候に似ているので始まったとか。オリーブからつくった化粧品、お菓子、素麺などが販売されていた。マルキン醤油の工場を通過。佃煮屋さんへ。醤油を使って野菜、海藻 小魚等を佃煮にした商品が沢山並んでいた。

小豆島の人口は 3 万人とか。生きるために色々な産業を開発しあらゆる知恵を生かし逞しく生きている 人々のことを知って心打たれた。

その6 白鷺城

2 泊 3 日の小豆島を後にして、姫路に向かった。小豆島の東の端、福田港から 1 時間半の船旅。船内は 10 人程の乗客でガランとしている。快晴で潮風に吹かれながら周りの島々を眺め、船内で販売していた お弁当、炊き込みおにぎり、唐揚げ、卵焼、沢庵、これがたったの 380 円!

を楽しんだ。そして小豆島のあれこれを思いだし、これから観る白鷺城のことを思った。姫路港に着くとすぐそこに、JR 姫路駅行のバスが待っていた。ホテルに荷物を預け、駅前の大手前通りをまっすぐに北の方へ 20 分位歩くと姫路城だ。入場券 1000 円 シニア無し、を払って中に入ると説明している女性がいた。私も立ち止まって聞き入っていた。「フム、フム」 と頷きながら尚もガイドらしい女性について行った。すると 「お客さま!これはプライベートのガイドですので御遠慮願います!」とお叱りをうけた。だがそのガイドを雇った若い夫婦は、私に 構いませんョ。どうぞ付いて来てください」と。感激!日本にも優しい人居るんだっ!

私が黙って付いて行った訳は、後楽園のボランティアガイドさんの事を知っていたからだ。それにして も訊ねもしないで付いて行って、私も図々しくなったと反省!

2014 年に新幹線で姫路を通過した時は、城全体にカバーがかけられていた。修理中だった。2016 年に通過した時は隣りに座ったおじさんがコーヒーを御馳走してくれ、色々喋りまくるのでお城を観のがしてしまった。

今度こそ、ジックリ観なくては、と思って立ち寄ったのだ。5年半もかけて修理した所は、壁を白漆喰で塗替え、屋根を葺き替えたそうだ。その姿は本当に白鷺の様に美しかった。家康の孫、千姫が本多忠刻と再婚し、姫路城で生涯で最も幸せな10年を過したと言われる。その時、千姫に仕えた侍女達の住まいだった、百間廊下を興味深くみた。



その7 バス 乗り放題

歴史の宝庫、京都にやって来た。コンビニのお姉さんが " 1日 600 円、バス乗り放題 " というのを教えた。便利でお得だった。 先ずは京の台所、400年の歴史を誇る京都三条、錦市場商店街を見物。 狭い通路のアーケードに、両脇ギッシリの店。肉屋、魚屋、お土産屋、 菓子屋、漬け物屋、佃煮屋、お惣菜屋、お茶屋 etc.

コンビニどころでは無い!そして人、人、人で立ちどまれないほど。

ロンドンの Borough マーケットなんて問題にならない。日本人は食に対して何とき め細やか感覚を持っているのだろう!魚ひとつとっても、さしみにしたり、焼き魚に したり、天ぷらにしたり、干物にしたり、佃煮、かまぼこ、と色々に料理する。 fish and chips だけではないのだ。驚きながら、キョロキョロして何一つ買わなかったのを今 になって悔やんでいる。もう一度、元気なうちに行ってみたい。

そこから少し歩くと昔の花街、先斗町(ぽんとちょう)に出た。鴨川沿いにあって四条 大橋と三条大橋の間にある。狭い石畳の道の両脇に料亭がギッシリ並んで、華やかな 着物姿の女性が行き来していた。

それにしてもポント町とは不思議な名前。何故? 調べてみた。 ポルトガル語、イタリア語で橋のことを ponte (ポント)と言う。

京都には、1576年、イタリア人が布教に来て南蛮寺、つまり教会を建てている。そ の南蛮寺は先斗町からそれ程遠くない所にあったのだが、秀吉のバテレン追放令により破壊され今は立 札がたっているだけとか。つまりイタリア語のポントから名付られたようだ。

2日目は銀かく寺と金閣寺へ

バスを降りて銀閣寺へ向かって歩いて行くと、左側に小さな川がながれ、川沿いの小道は桜並木になっ ていた。ふと見ると " てつ学の道"と書かれた案内図があった。噂に聞いていた "てつ学の道"とはけ の事か、と思い嬉しくなった。てつ学者、西田幾多郎が散策し、思索に耽った、と言われる。銀閣寺に 着くと広い広い庭園。白砂が波形の美しい模様に仕立て上げられていた。池のほとりに咲くつつじを眺 め、更に孟宗竹の林を左に見ながら石段をいくつも登り切ると、展望台があり、京都の街が一望できた。 銀閣寺は臨済宗の禅寺で 1490 年室町幕府、八代将軍足利義政によって創建。

次に、再びバスに飛び乗って金閣寺へ。修学旅行の学生達で賑わっていた。しぶい銀閣寺とは対照的に、 ピカピカしていた。それは1950年、京都の大学生の放火により全焼したので、1955年に建て直し、金 箔も塗り治したためか。金閣寺は臨済宗の寺で1397年、足利義満が創建した。

その8 二本の杖

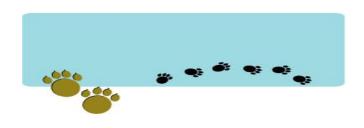
2週間の旅の後半、京都と大阪で気付いたのだ。それはリュックを背負い、2本の杖を使って路上を蹴る

ようにして歩いているグループだ。

1本ではなく2本も持っているのだから、余程重度の障害があるのだろうか、 と不思議に思ったが訊ねてみる勇気はなかった。

ロンドンに帰ってその事を友人に話してみたら、彼らもやっているそうで、 実物の杖を使って歩いて見せてくれた。ノルディックウォークと言う運動で、 クロスカントリーの選手が夏の間、体力維持のため行ったトレーニングから ヒントを得て始まったとか。足腰が強くなり姿整もよくなるらしい。なる程! 日本人がますます元気で長生きする訳だ。日本人はよそ様の良いところを巧 みに、素早く取り入れて、それをもっと良くするという才能をもっている。 それを、誇らしく思う。

今度の旅で、これまで気づかなかった、日本の素晴しいところをいくつも発見し、日本人として誇らし く思った。



英国春秋歌壇

孫の姿と

バロー典子

故郷は四季ある国の大和にて 季節移ろう英国好まし

> 枝々のすき同に現く青空を 日々に埋めゆく新緑パワー

> > 両側に白いレースの花咲きて ブライダルレーンの田舎の小道

> > > M4 をドライブすれば真黄色の 菜の花畑突如現る

ゆかしきは"御車返し"という桜 ウエストンバートの公園にあり

> つり花の水滴りて清々し ウオーターワゴンの姿見えねど

> > 記録的日でりの夏の後の雨 もの懐かしき音と香りと

> > > 友逝きて在りし日のこと偲びおり かの優しさに再度触れたり

誰ひとり残されし日のいくばくも 知らずに生きる今の尊さ

> 育ちゆく孫の姿を楽しみて 者いゆく時のありて嬉しき

英国春秋俳壇

クーパー矩子

秋の雷

我が胸もうちさわぎ初む秋の雷

秋興や昔の友と会う銀座

夏やぜや笑って暮らせと助言さる

昼顔や祈りとどけむふるさとへ

日照雨たちまちかかる秋の虹

離れゆく友は異人や朝の雷

面影も薄礼ゆきたり夏衣

私の好きな人 (ファーガス・アンコーン)

惠 ビドル

今秋号のテーマは"私の好きなこと/楽しみ"だそうで、食べることが好きな私は、そんなことでも書こうかなぁ~と思っていたのだが、なにかの折に編集部の方とお話しして"私の好きな人"でも良いわね~♪ということになり構想を変えた。但しここに登場する人物は私が心から尊敬して愛する人で、好いた惚れたの意味ではないことと、彼の生涯を語るにあたって、人によっては不快感や衝撃を与える部分があるかもしれませんので、予めお断りしておきます。

私の大好きなマジックサークルの大ベテラン、ファーガス・アンコーンが 今年の3月に亡くなった。 彼は1918年にケント州 Sevenoaks で生まれ、4歳の時に買ってもらったマジックセットがきっかけでマ



ジックに興味を持ち、18歳の時に"Wizadus"の芸名でマジックサークルの最年少メンバーとなった。膀胱癌と老衰で、眠るように亡くなった時は99歳、サークルの最年長/年功のメンバーだった。

彼と知り合ったのは、2001年にマジックサークル創立100周年記念の大会が、ロンドンのUCLで開かれた時だから今から17年前の事。夫と二人で"折り紙と紙切り芸の歴史"を実演も混ぜて講演したおり、聴衆の中に一際目立って押し出しの良い御老人が居て、レクチャーの後にファーガス・アンコーンだと自己紹介して下さってからだ。それ以来Euston駅近くのマジックサークル本部で度々お会いして友好を深めてきた。

マジックサークルの本部では毎週月曜日の夜にメンバーの為の催し物があり、350 席の小さなシアターを始め、マジックに関する展示場や図書室、地階のバーでは、いつでも気楽にマジック好きのメンバーが集まって談笑出来るようになっている。メンバーは全員が(現役/引退を含めて)プロ又はセミプロのマジッシャンなので、人好き話好きの好々爺が多く、いつもトランプ・カードを持ち歩いては、バーのあちこちでトリックの披露が始まる。そんな中に於いても、ファーガスは最年長であるにもかかわらず、何時もネクタイを締めてジャケットを着用し、綺麗な白髪をキチンと撫で付けて矍鑠としており、一番の"紳士"であった。

そして、過酷な戦争体験をして来たにも関わらず、元警察官の誇りと穏やかな言動、私が最も好ましいと思うところの、飄々とした雰囲気を持ち合わせていたのである。

ファーガスは「マジックばかりにうつつを抜かすな~」と父親に叱咤されて、Sevenoaks でタイル工場の会計係をしていたが、1939 年に第二次大戦が勃発。直ちに召集令状が彼に届き Royal Artillery の砲撃兵としての訓練が始まる。1941 年の末、東南アジアに駐屯中の英国軍は、日本軍の進撃に脅かされ窮地に立たされていたから、その巻き返しの為にファーガスの所属する砲撃部隊(118th Field Regiment)が、シンガポールに輸送船で送られる事になる。ファーガス 23 歳の時であった。

年が明けた 1942 年に、部隊は激しい日本軍の攻撃をかいくぐってやっと上陸 したものの、武器や弾薬の輸送中に再度の攻撃に遭い、乗っていたトラックの



弾薬が爆発してファーガスは瀕死の重傷を負う。運び込まれたアレクサンドラ軍病院で一命を取り止めるが、ここも安心出来る場所では無くなっていた。

同年の2月14日には日本軍が病院にも突入して来て、負傷兵、医師、看護婦などを含む200名近くが無差別の殺戮にあっている。ファーガスが生きてここを出られたのは、彼が爆発傷による失血で瀕死状態だった為、日本軍は既に死んでいるもの~と判断したらしい。

東南アジアはまもなく日本軍に占領され、英、印、濠、の8万の兵が捕虜となってシンガポールに集められる。若いファーガスは捕虜専用の病院で回復を待った後、悪名高い"Changi 捕虜収容所"に送られて、ビルマ鉄道の建設作業に駆り出される身となる。ファーガスはこの後3年間、日本軍の捕虜として激しい強制労働と残虐行為に耐え、飢えとシラミによる不眠、疥癬やアミーバ赤痢、マラリヤ熱に悩まされながらも、終戦になって収容所が解放されるまで生き延びたのである。

ビルマ鉄道の工事で、先ずファーガスに当てられたのは、煮えたぎったクレオソートの入ったバケツを持って、100ft の高さの足場を登り詰め、竹筒に流し込む作業だったが、高い所が苦手なファーガスはクレオソートのバケツを持ったまま、足場の上で身動き出来無くなってしまう。罵声を浴びせても足場を叩いても動かないファーガスに業を煮やした作業監督兵は、あっという間に彼を追って足場を登って来ると、バケツの熱いクレオソートを頭からぶちまけたのである。ファーガスは大火傷を負い、再び収容所の病院へ送り返される事になる。捕虜収容所や病院の中でもファーガスのマジックは好評で、捕虜達の間で彼は "the conjuror of the river Kwai" と呼ばれ知られていたから、手品好きの日本軍指揮官の目に留まるのは時間の問題だった。そしてそれはファーガスにとって幸運でもあった。

Changi 捕虜収容所の総指揮官 Yoshio Osato は、ファーガスを呼ぶとコインを手渡して「手品をやって見せろ」と命令した。捕虜生活の中で、身近にあるものを使ってマジックをすることに慣れていたファーガスは、コインを目の前でサッと消して、総指揮官の卓上にあったイワシの缶詰の中から取り出す



という技を見せた。Osato 総指揮官はその手品にたいそう満足し、イワシの缶詰を「捕虜が触った物など喰えるか」という理由でファーガスに与えたそうである。

役に立たない捕虜はどんどん見捨てられるという状況の中で、ファーガスが生き長らえることが出来たのは、戦場に於いてもマジックが、敵味方に関わりなく慰めになったからだ。そしてこの時の経験で、食料を使ったマジックをやったら、それは捕虜の口に入るという事を学んだ。

看守や、炊事兵の中にもマジック好きがいて「手品を見せてくれ」と頼まれることが増え、そのお返しが一握りの米でも一本の煙草でもありがたかった(煙草は食べ物と交換できた)。配給の粥だけでは、3年もの長い間の重労働に耐えることが出来ず、沢山の捕虜が死んで行ったのである。

ある時は 0sato 総指揮官に、卵を使う手品を見せるから 50 個用意してくれと頼んだ事もあった。実際に使うのは一個だけで、残りは同じ捕虜兵舎の仲間に配ってしまったのだった。披露した手品に、総指揮官は大そう満足したものの「残りの 49 個はどうした?」と問われ、ファーガスは「とっても難しいテクニックなので、練習するのに全部使ってしまいました」と答えた。総

指揮官はふんっと笑って許してくれたそうだが、この時は命が縮まる程怖かったらしく、戦後何十年経ってもこのトリックだけは「考えただけでも膝が震える」と言って、二度と演じられることは無かった。

捕虜達には家族へ連絡する術は絶たれていたが、赤十字の調査カードだけは時々配られ、記入する事が許された。このカードは捕虜生活の状況を報告をするもので、必要事項に丸をつけるだけだったが、赤十字から捕虜の母国軍を通して親元へ送付されるので、日本軍監視官の厳しい検閲が行われた。当然、最後に署名をする余白にも名前以外は何も書けなかったが、速記が出来たファーガスは、自分の名前に速記のループを書き加えて "Still Smiling"とした。幸運にも両親は速記が読めたので、彼の無事を知った上に、送り続けられるこのメッセージに心暖められるのだった。

捕虜生活にも慣れて来た頃のこと。収容所の浅く溝を掘っただけの便所は、何時も蝿が大量発生する原因になった。これに閉口した日本軍は、蝿10匹毎にいくらかの小遣いを支給するとして、捕虜に蝿の捕獲を命じた事があった。小遣いと言っても微々たるものだったが、これは収容所にやって来る現地人の物売りから、モウ(米粉の菓子)などを買うのに役立ったから、何千という飢えた捕虜が、ふらつきながらも必死になって蝿を獲ったのである。そしてまもなく蝿の数が少なくなると、ファーガスはこっそりと蛆を育てて孵化させたり、手先の器用さを生かして、古タイヤとセロハンで本物そっくりの蝿を作ったりして(蝿を焼却炉に放り込むとゴムの焼ける匂いがするので、ヒヤヒヤしたそうだ)数を水増しにし、小遣い稼ぎを続けたそうである。と書いていくと、不謹慎にも収容所の生活は何やら楽しそうに見えてくるが、ファーガスは「もうこれで終わりだ」という覚悟を決めるような事を何度も経験したそうだ。それでも自暴自棄に陥らず、常にオプティミストでいられたのも、マジックのおかげだったと言う。

やがて終戦を向かえ捕虜収容所から解放された時、ファーガスの体重は5st しかなかった(捕虜になった彼の所属部隊980名の内、生きて帰れたのは250名だけであった)。

解放された兵隊は一様に痩せ衰えて悲惨な状態だったので、更に3ヶ月現地で療養をした後にやっと帰国が許されたそうだが、この時捕虜となった者は「大英帝国の恥」とされ、帰国しても一切この事を他言してはならないと命令されている。帰国後は、せめて同じ経験をした者同士で集まり、語り合うことに依って心の慰めになればと、Far East POW の会をフェスティバル・ホールで開いたりしているが、ここにも上からの圧力がかかり、ロンドンの自治体からホールの使用禁止を言い渡されるという事もあったそうだ。捕虜経験の苦しみを心の奥底に閉ざしてしまった為に、殆どの者に日本軍、更には日本国に対する燃えるような激しい反感と憎悪を、一生抱き続けさせることになったのである。

話は私事になるが、私の父は大正の末、北海道の小さな漁村の網元の家に四男坊として生まれた。当時、家督を継げない次男以下は、都会なら丁稚奉公に出るか工場に勤めるなどしたが、田舎に生まれた父はそれも叶わず、口減らしの為に海軍に志願するしかなかったのである。小さい時から海で泳いで鍛えた6尺に近い体格と遠見が効く視力の良さに甲種合格。その後の訓練でも射撃の感の良さを認められ、父は銃砲手(対空砲と機銃の)として空母の護衛戦艦に配属された。急降下して来る敵の艦爆機(爆弾搭載)や艦攻機(魚雷搭載)を、対空砲と機銃で撃ち墜とす事は至難だったらしいが、父は"見越し射撃"という未だ照準器に入っていない敵機の、未来位置を予測して空間を撃つという技に長けていたので、体罰の厳しい海軍に在って大変重宝されたらしい。

日本海軍は、南はニューギニアから西はインド洋まで縦横無尽に大海を制圧したが、ミッドウェー海戦の辺りから敗北を重ね始める。艦隊を守る味方の艦上戦闘機の数が減るに従って、大量に飛来してくる敵艦爆機の攻撃を防ぎきれなくなり、敵機は爆弾投下の確率を上げていく。爆弾は当ると甲板を突き破って艦内で爆発する為、爆風に吹き飛ばされて即死する者、手や足をもがれた者が続出し、燃料タンクに火が付けば、艦上は火だるまになって逃げ惑う者などで、阿鼻叫喚の地獄絵図を見るようだったそうだ。

戦争も末期になると日本海軍の主要な空母は全て撃沈され、幾度もの海戦を戦い抜いて来た、父の乗った護衛艦も終に大破、後方を走る駆逐艦のカッターに救助されて命拾いしたそうだが、ご存知の通り日本の戦況は悪化する一方で、まもなく大和と残った数隻の護衛艦が、沖縄への総攻撃に出航していくのを見送った後、終戦を向かえたのである。

見栄っ張りで強がりの父だったが、この時の体験は Trauma となって残り、叫び声をあげて夜中に目覚める事が度々あり、母と結婚した後も普通の生活になかなか戻れず、自殺未遂に及ぶこともあったらしい。

父が戦争体験を語ることに依って徐々に癒され始めたのは、戦後 10 年以上も経った(私が生まれた)頃からで、私は父の膝の上で、父が茶飲友達としている戦争談議を聞いて育ち、"戦争は起こしてはならない"という思いを早くから自覚したのである。

ファーガスは Sevenoaks に戻った後も、今で言う Post War Syndrome に悩まされる日々が続き、いつか普通の生活に戻れる日が来るのだろうか?という不安と闘いながらも、戦前からの恋人ルシールと結婚して二児をもうける。悲惨な目に遭い目撃して来たにも関わらず、敵を恨んだり憎んだりすることも無く、静かで穏やかな生活を送れるようになったのは、妻の辛抱強い援助と、二人の子供のおかげだと



まで言い切っている。マジックを楽しみ、Tonbridge のケント・カレッジで速記の講師や、特別警察官としての暮らしが落ち着いて来ると、日本語も習い始めた。そうして戦争を振り返って、ファーガスはこう答えることが出来るまでになった。

 \lceil I was blown up. I was shot. I was survived a massacre. I was buried alive twice and I was up in front of a firing squad twice. Apart from that it was all right.

1988 年には、ファーガスの戦争体験談をピーター・フィアンズが書き下ろし "Captivity, Slavery and Survival as a Far East POW" のタイトルで、ペンと剣社から出版された。この本を読んで深い感動を覚えた、我々の仕事仲間であるマジッシャン、リチャード・ジョーンズが(王室騎馬隊でもある)、2016

年に ITV の番組 "Britain's Got Talent"のファイナルで、ファーガスの経験からインスピレーションを得たトリックを披露しているので、ご記憶の方も多いと思う。

2005 年 戦後 60 周年を期に、ファーガスは息子さんと共にシンガポールを訪れている。 その後 "東と西の架け橋"として日本にも足を伸ばすと、沢山の贈り物で歓迎された上に、捕虜経験の 講演をする機会にも恵まれた。この時の謝礼は、英国内でも続けてきた講演料と同様に "The Not

Forgotten Army Association" (このチャリティーのセントジェームズ・パレスで毎年開かれるお茶会の事は、春号に書いた)の一部門である"ビルマの星" に寄付している。そしてロンドンの日本大使館で、捕虜収容所の元看守兵と再会。お互いの健勝ぶりを喜び合うことによって、"戦争" に一つの終止符を打つ事が出来たのである。

ファーガスと友好を深めていく過程で、彼が私に話す捕虜経験談は、マジックがいかに生き延びることに役立ったかに一貫しており、残虐 行為を受けたところは決して語らなかった。だがそれは出版物や人の 噂で否応無しに耳に入り、なんと言って良いやら言葉に詰まったこと



があるのを記憶している。そんな私に彼は「いいかいよくお聞き、あれは戦争だった。どちらも必死に 戦った。僕が捕虜になったのは誰のせいでもない、運悪く間違った時に、間違った場所に居ただけなん だよ」と言ってくれたのである。

「せっかく習った日本語も、錆びついてしまったなぁ」と言いながらも、日本の文化に興味を持ち、私の紙切り芸を大そう好んでくれた。そして「日本女性は美しい、君の旦那は幸せ者だ」などと嬉しがらせを言うことも忘れなかった。

最愛のルシール夫人を1982年に亡くした後は警察を退職し、マジックと捕虜経験談を合わせた小さなショーを創って色々な場所で講演しながら、二人の子供と孫達に支えられて Sevenoaks で長いこと独り住まいを続けていたが、往年は講演に出る事も無くなり、息子さん宅に近いレジデンシャル・ホームに移って静かな余生を送っている。

それでもファーガスは毎週月曜日になると、キチンと身だしなみを整えてマジックサークルに出て来る事を楽しみにしていた。マジックサークルのバーでは戦争体験者が集まると、どうしてもそのことに話が咲くのだが、優しい彼は私が側にいる時は、居心地の悪い思いをさせたくないという気遣いで、さり気なく会話の方向を変えてしまう。そして私の手を握ると「大丈夫かな?」と優しくウィンクしてくださるのだ。

2018 年 4 月 16 日、Holy Trinity Church Hurstpierpoint (ブライトン近郊)で、ファーガス・アンコーンの生涯を讃える式典が執り行われた。彼の遺族や、友人、マジックサークルやフリーメイスンのメンバー、警察やチャリティー団体からも沢山の参列者が集まった。

式は息子のサイモンさんの言葉で始まり、マジックサークルの会長スコット・ペンローズに依る "Broken Wand" (マジッシャンが亡くなった時は、白黒のマジック棒が折られる)の儀式の後に、ピーター・フィアンズ、Lance Corporal リチャード・ジョーンズ、孫娘のアリシアさん、と Tributes が続き、ファーガスが好きだったグレン・ミラーの "A Nightingale Sang in Berkeley Square" が奏でられる。この曲は青春期を戦争に奪われた若者達を慰め、ルシールとティーダンスを楽しむファーガスを彷彿とさせる。

そして Reflection. ファーガスの生涯が、捕虜収容所の経験を主に語られ「ビルマの星がまた一つ消えた」と締めくくられて、坂本龍一の "Merry Christmas Mr Lawrence" が流れ出すと、参列者の多くが涙に誘われるのであった。この曲はあまりにも印象的で美しく悲しい、私は何度聴いても彼の比類なき才能に感動してしまう。全員で祈りを捧げた後、Household Cavalry (王室騎馬隊)の吹く "The Last Post"が、場内に鳴り響いて式典も終わりとなった。私の尊敬する大好きなファーガス、今頃は天国で愛する奥様と逢っておられることだろう。ご冥福をお祈りいたします。

Fergus Gordon Anckorn 10th December 1918 \sim 22nd March 2018

